平成20年度・戦略的大学連携支援事業

京えふで

「地域内大学連携によるFDの包括研究と共通プログラム開発・組織的運用システムの確立」

2009年度 事業報告書

京都FD開発推進センター

The Kyoto Faculty Development Center

はじめに

平成20年度文部科学省「戦略的大学連携支援事業」に採択された、佛教大学を代表校とする18大学・短期大学の連携事業「地域内大学連携によるFDの包括研究と共通プログラム開発・組織的運用システムの確立」は、補助事業2年目である平成21年度に入り京都ＦＤ開発推進センターが本格的に稼働し、連携大学教職員による3つのワーキンググループの活動と連動して、旺盛で活発な活動を実施してきました。

平成21年度の活動内容は本報告書前半部分で詳述されますが、ＦＤセミナーの開催（2回）、新任教員合同研修、連携大学のＦＤ指導者を養成するための「京都ＦＤｅｒ塾」実施（3回）のほか、時宜に応じた学習会、報告会、シンポジウム企画運営（2回）等の行事が数多く開催されてきました。また、連携大学ばかりでなく全国の大学関係者から大きな反響をいただいているマンガ版ＦＤハンドブックの制作・刊行は、連携大学の新任教員に対する研修プログラムの一環として取り組まれたものです。さらにＩＣＴ技術を活用した授業支援システムの実践と検証、「授業評価」「授業改善」に関する連携大学全教員意識調査（ＷＥＢアンケート）にも取り組んでまいりました。この他にも全国各地で行なわれている高等教育関連行事への連携大学教職員派遣や、年4回発行しているニューズレター、ＨＰの運営といった情報提供・広報活動、諸会議の開催と運営などさまざまな日常業務を行なってきております。

本報告書は、平成21年度に連携18大学・短期大学と本センターが共同で行なってきた諸活動をまとめた事業活動報告と、平成22年2月にアメリカ・カリフォルニア州の7つの大学と、イギリスの4つの大学へ延べ13名の教職員を派遣し、実地調査、ヒアリングを行ってきた際の視察調査研修報告を合わせたものとなっております。

本報告書を、最終年度を迎える平成22年度のセンター活動の指針として、また平成23年度以降における18大学の枠を超えたＦＤ連携活動の基礎として、大いに活用していただくことができれば幸甚に存じます。センター活動3年目を迎えるにあたり、あらためて本センターのさまざまな活動へのご協力、ご支援をお願いいたしますとともに、本連携事業の目的達成のために忌憚のないご意見、ご批判を賜りたく、重ねてお願いを申し上げます。

平成22年3月

京都FD開発推進センター長
八木　透
《佛教大学教学部長・教授》

目　次

はじめに

《第1部》2009年度活動報告

Ⅰ. 2009年度活動方針
1. 2009年度活動計画 …… 4
2. 連携大学の現状 …… 6

Ⅱ. 2009年度活動総括 …… 8

Ⅲ. センター活動記録
1. 活動記録 …… 12
2. 活動カレンダー …… 23

Ⅳ. 各WG活動記録
1. FDer養成ワーキンググループ …… 26
2. FD研修プログラムワーキンググループ …… 34
3. FDシステム検討ワーキンググループ …… 44
付録1　全教員アンケート集計結果と回答分析 …… 52
付録2　クリッカー授業実践報告 …… 59

Ⅴ. 2010年度活動方針、2011年度以降の連携体制案 …… 92

《第2部》2009年度冬季海外視察調査報告

視察先選定理由

Ⅰ. カリフォルニアFD視察調査
調査の概要 …… 98
カリフォルニア州立大学ロングビーチ校 …… 100
カリフォルニア州立大学フラトン校 …… 105
カリフォルニア芸術大学(CalArts) …… 111
サンフランシスコ芸術大学(SFAI) …… 118
カリフォルニア大学バークレー校 …… 123
バークレー・シティ・カレッジ(BCC) …… 128
サンフランシスコ州立大学 …… 132
総括 …… 138

Ⅱ. イギリスFD視察調査
調査の概要 …… 144
レスター大学 …… 146
ケンブリッジ大学 …… 153
ノッティンガム大学 …… 159
ロンドン大学キングスカレッジ …… 165
総括 …… 169

Ⅲ. 視察調査報告会資料 …… 174

第1部

2009年度
活動報告

2009年度 活動方針：2009年度 活動計画

戦略GP
「地域内大学連携によるFDの包括研究と共通プログラム開発・組織的運用システムの確立」
2009年度の活動について（案）
-WG-

研修プログラムWG

活動目的
FD職能開発のための汎用研修プログラムの開発
モデルプランの設計と体系化の検討
プログラム終了者への履修証明書発行の検討

>新任研修プログラムの開発
・集合研修：講演、ワークショップ、分野別講習　*自校教育含む
・ハンドブック配付
・ピア・サポート（各大学に取り組みを奨励）*メンター制度を想定
・報告書作成
・SNSの活用：事例紹介（取材）、ミニアンケート、情報交換、ピア・レビュー

>ハンドブック作成（新任教員対象：配布は連携校すべて）
・授業設計、コース・デザイン
・Tips （一般的に利用できるGenericな内容のものにする）
-要素（目次）の項目出しからのスタートがスムーズか？
案：シラバス/評価/教材活用/授業外学習支援/欠席者/ドロップアウト対策/教員間のコミュニケーション
Keyword: Content/Concept/Interactive

>分野別研修
主に理系・芸術系学部、学科を想定
・参加校の募集、ニーズ確認（広く連携校以外も対象とする）
・先進事例のResearch
・Good Practiceの共有

FDer 検討WG

活動目的
ファカルティ・ディベロッパーの養成
-対象者：各大学のFD活動推進者　ex) 各大学の新FD委員会メンバー
FDハンドブックの発行
FDコンサルテーション制度の検討

>FDer養成のためのワークショップ・テーマの検討→専任担当者による企画実現へとつなげる
・授業方法の紹介：Ice Breaking、フィードバック法など
・授業準備の方法：シラバス作成、教材活用、学内外の学習資源の利用など
>ワークショップの成果→文書（パンフレット）化・web化＝FDハンドブック
>連携校の中での先進事例の共有
>座談会の開催

▲昨年度実施WGでの活動提案
どのようなFD活動が求められているのか・・・まず学生のニーズを知りたい
【学生に対するアンケートの実施】
・学生の考える"よい授業"とは？
・学生が後輩に紹介、推薦する"よい授業"
・授業評価アンケートに対する学生の評価
→web上での実施、集計：時期は？9月～10月
対象は？全学生か、学年や学部で絞るのか？

FDシステム検討WG

活動目的
FD共用システム・アプリケーションの開発・提供
-FD共用システム等の開発と運用
-新たに開発するFDプログラムのモデル作成と実施検証（モニタリング）のコーディネート
-ティーチング・ポートフォリオの検討

導入検討システム
WEBアンケートシステム/Text Mining/クリッカー/SNS（LMS）

>上記システム・アプリケーション開発への参画
>テスト運用の際のユーザー参加・フィードバック

具体的には・・・
>True Tellerの活用方法検討
・サンプルデータを利用してのデモ開発（学びフォーラムアンケートを利用）
・有効利用方法
>クリッカー等のICTを利用した授業開発
>SNS階層設計/利用ルールの検討・テスト運用（β版）

>コンサルテーションへの活用

戦略GP
「地域内大学連携によるFDの包括研究と共通プログラム開発・組織的運用システムの確立」
2009年度の活動について（案）
-共通事業-

（1）FDセミナー企画

・戦略GP採択によるFD開発推進センターへの事業移行に伴い、開催時期・回数については以下の通りとしたい
・センター主導とWGからの要望による開催を想定
-センター主導による中規模を年2・3回開催（昨年は7月と11月に開催）
−WGからのボトムアップによる小規模企画については要望都度開催

センター主導セミナーについて
＞開催時期（予定）：年二回
第1回　7/18
第2回　10月下旬

＞セミナー要旨（案）
・「連携校内の事例の共有：理工系大学におけるFD取り組みについて」
1）京都工芸繊維大学の活動事例報告
2）有識者によるコメント（連携校により1名、外部より1名）
-

（2）海外視察企画（年二回程度）

>時期
①8月中旬～9月上旬
②2月上旬～下旬

>視察目的（キーワード）
・先進事例　・e-learning　・地域連携　・中小規模大学　・ICT技術の理解と活用した授業の視察
・リベラルアーツ

>候補地（____は2009年夏季実施での訪問候補）
a.アメリカ　/　b.東南アジア：マレーシア・シンガポール　/　c.オーストラリア
d.北欧（スウェーデン・デンマーク・ノルウェー・フィンランド・アイスランド）
e.東アジア（韓国、中国、香港、台湾等）

視察内容（案）
a.ベイエリアに点在する中小規模大学（州立大学、コミュニティ・カレッジ）を視察、教育関連ICT開発会社への訪問・実演見学/LA地域の芸術系大学への訪問・取り組みをヒアリング

b. マレーシアにおける高等教育機関の急増に対する対応策・改善策についての視察、およびイギリス・オーストラリアの大学の教育プログラム（オフショア/ツイニングプログラム）が高等教育機関の中に入ってきている状況についてのヒアリングを実施

c.ヴィクトリア州にある大学コンソーシアムへの訪問を軸に様々な規模・種類の大学でのFD取り組みを視察する/教育関連ICT開発会社への訪問・実演ワークショップ参加等

*2月実施については前二回の海外視察の成果を踏まえてd、eを含めて検討する。

（2）´海外組織主催イベントへの参加

【POD】：Professional and Organizational Development Network in Higher Education
PODとは・・・アメリカ高等教育機関におけるFD担当者のためのネットワーク組織

上記、PODでは毎年、秋に国際学会を開催している。大規模講義のほか、多数の小さなワークショップが開催され，参加者が各自の興味や専門分野に応じて選択が可能な形式となっている。
現在の国際的なFDの状況や最新の情報収集が可能となる有意義な機会と考えられるため研究員、調査員を含めた数人での参加を行いたい。

>時期:2009年10/28-11/1
>場所:アメリカ　ヒューストン

（3）国内調査及び派遣支援について

センターでは以下の内容を定常的に実施する。
＞国内イベント情報の収集・告知
・近日開催予定のイベントについては別紙参照
・今後はHPやニューズレターを通じて、周知を実施する

＞参加希望の際の交通費支援
・告知されたイベントに対して連携大学内で参加希望者がいる場合、一定の基準内で出張費等を支援する

*当面は運営委員会等のメーリングリストを利用するので、各大学の委員会等で周知ください。

（3）広報活動についての進捗状況、懸案事項について

＞センターHPについて
業者よりデザイン案と見積書の提示あり
今後、掲載コンテンツ、デザインの確定、FDシステム（SNSやWEBアンケート）へのリンク設定等の作業を行う。システムWGにメーリングリスト等で報告、相談を行って進めるが、本稼働は6月～7月になる見込み。

＞SNS、ブログについて
外部への公開はセンターHPの運用開始以降となるが、WG等が活用するためのSNSを早急に整備する。センター・ブログもSNS内での運用として開始する。

＞ニューズレターの発行について
毎月の発行を目指し、早急に第1号を発行する。センターの活動紹介を主に、外部セミナー等の情報提供や事例紹介を掲載する。

2009年度 活動方針：連携大学の現状

2009年4月21日
センター会議・連携運営委員会資料

連携大学のFD活動の現状

3月中に連携18大学・短期大学（実質は14校）中、2校を除く12校を訪問し、FD活動の現状についてヒアリングを行なった（別表参照）。いずれの大学からも、他大学の取組状況や活動事例を知りたいとの希望が強く出された。

1. 学生による授業評価は、全ての大学で実施している。年2回、授業中に用紙配布・回収、10～15問程度の選択肢による設問と自由記述の組み合わせ、ほぼ全授業を対象とする、といった実施方法は共通しているが、実施率の多寡、OMRか手集計であるか、には違いがある。
   例外*はあるが、設問内容はほぼ共通している。
   *特徴的な例外：京都産業大学の自由設問例の提示や、京都工芸繊維大学の学習目標など

2. 授業評価結果報告書は、全ての大学が作成している。WEBにより公開している大学もある。

3. 授業評価結果の検討は、結果報告書やWEB公表の際に、結果集計表・グラフだけでなく、結果の分析、改善方策の検討、講評等が記載されているかを見た。半数以上の大学が検討結果を記載しているが、その多くは大学全体のセンター・委員会による分析であり、学部や学科、専攻等による検討結果は見られなかった。

4. 講演会、研修会の開催は、全ての大学で年1回以上実施している。多くは学外の著名講師による講演会であるが、テーマを決めてシリーズ化している研修会、学内教員による事例報告会も見られる。

5. 新任教員研修は、半日～1日程度の就任時研修はほぼ全ての大学が実施しているが、これ以上のプログラムを行なっているのは半数程度である。集合研修がほとんどである。

6. 教員相互の授業参観は、3/4程度の大学が行っている。参観者の数が少ないという悩みが多く出されたが、期間を決めて全ての授業を公開したり、何年間かを掛けて全ての教員が公開するようにしたり、といった工夫をしている大学が見られる。

7. 授業検討会は、新任教員研修や授業参観の一環として行われる、特定の教員・授業を対象にした教員グループによる意見交換であるが、数校が実施している。

以上のように、授業評価とその報告書、講演会の3つはほぼ全ての大学が実施している。その活動を形式だけに終わらせず、活用して改善に結び付けていく取り組みが必要であるとの認識が、多くの大学から出された。

以上

（文責）専門研究員　深野

連携大学のFD活動の現状（別表）

大学名	授業評価	授業評価報告書	評価結果検討	講演会・研修会	新任教員研修	教員相互授業参観	授業検討会	その他	コメント	実施組織
A大学	○	○	○	○	-	-	-		授業評価結果の活用方法が課題とのこと。次のステップを模索中。	FD特別委員会
B大学	○	○	-	○	○	○	-	FDサロンプロジェクト	学部別のFD活動とともに、センターの活動レベルも高い。	大学教育開発センター
C大学	○	○	-	○	-	-	-	学生満足度調査	学長、理事長主導のFD。研修会の講師がユニーク。教授法の研修など、体系的な取り組みとなっていないという問題意識がある。	FD委員会
D大学	○	○	○	○	○	○	-	卒業者アンケート 教育懇談会	それぞれの活動のレベルが高く、結合している。学内教員からもFDのレベルが高いという声あり。	総合教育センター
E大学	○	○	○	○	○	○	-	FD研究会（共同研究）	全学のFD活動と各学科の動きとの連携が課題。授業評価結果の活用の検討に踏み出している。	教務委員会内のFD部会
F大学	○	○	-	○	-	○	-	卒業生満足度調査	授業評価結果の分析をしているが、その活用が課題。	FD委員会
G大学	○	○	-	役職者向け△	-	学部により△	学部により△	役職者研修	トップダウンがなじまない。学部・学科ごとの取り組みとなっているため、活動レベルにばらつきがある。	全学FD委員会
H大学	○	○	-	○	-	○	○	FDサロン、全学FD講演会	全学的FD活動と学部単位のFD活動との連動が課題。	FD推進委員会
I大学	○	○	○	-	○	○	-	『学生指導例』冊子	授業評価は学期途中に実施してフィードバック。非常勤教員からの要望が改善につながっている。	FD委員会
J大学	○	○	○	○	△	-	-	『授業改善集』『学生意識調査』	授業評価結果に担当教員のコメントを付けてWEBで公表。学生の理解度を高める取り組みに興味がある。専門家の不在が課題とのこと。	FD推進委員会
K大学	○	○	○	○	-	○	○	基礎学力調査、入学前教育等	それぞれの課題にしっかり取り組んでいる。	教授法開発室
L大学	○	○	○	○	○	○	○	教育プログラム支援制度	自校教育に興味がある。コンサルティングに期待している。	教育エクセレンス支援センター
M大学										
N大学	○	○	-	-	-	-	-			
○印	13	13	7	10	5	8	3			

2009年度 活動総括

平成20年9月に、佛教大学を代表校とする京都地域18大学・短期大学の連携事業「地域内大学連携によるFDの包括研究と共通プログラム開発・組織的運用システムの確立」が文部科学省戦略的大学連携支援事業に採択され、同年10月に佛教大学の八木透教学部長・教授をセンター長として京都FD開発推進センターを発足させた。

平成20年度中には、京都FD開発推進センター会議、FD連携運営委員会と3つのワーキンググループを組織し、補助事業期間中の事業計画を策定するとともに、キャンパスプラザ京都内にセンター事務室を確保し、基本システム機器を導入するなどの準備作業が行われた。平成21年3月に専門研究員と専門調査員が着任するまでの準備作業は、大学コンソーシアム京都事務局によって全面的に担われてきた。

1. センターの本格稼動

平成21年3月に専門研究員と専門調査員が京都FD開発推進センターに着任したことにより、連携大学・短期大学のFD担当者、大学コンソーシアム京都事務局と、京都FD開発推進センターの三者による事業推進体制が本格的に稼動することとなった。

専門研究員と専門調査員は、まず連携大学のFD活動の現状と連携事業に対する各大学の期待を調査することから活動をはじめ、さらに国内外の大学の先進的なFD活動を調査することによって、FD連携事業の目的と任務、補助事業期間中の目標（着地点）と将来的な展望（理想像）について再確認を行なった。

〔京都FD開発推進センターの使命と任務〕

「京都FD開発推進センター」は、平成20年度文部科学省「戦略的大学連携支援事業」に選定された18大学・短期大学による「地域内大学連携によるFDの包括研究と共通プログラム開発・組織的運用システムの確立」の取り組みを組織的に推進することを目的として設置され、京都地域の教育力を長期的に 支援していくことを使命としています。

学士課程におけるFDの義務化をむかえ、各大学・短期大学において具体的なFD活動の充実が問われている中で、①FDコンサルテーション、②FD 研修プログラムの提供、③FDプログラム開発・検証のモニタリングやコーディネート、④海外・国内のFD・SD情報の蓄積と発信の4領域において、実効性 のあるプログラムを策定することによって、現状の打開と改善につなげることを目指しています。

また、FDの先進的な取り組みを、国内・海外問わず調査・研究し、FD活動の京都モデルを開発すると同時に、FDを支援する立場である職員の能力 開発を視野に入れ、SDプログラムの要素と連動させたFDプログラムを開発し、教職協働を支援するための体制と基盤を確立することが期待されています。

〔京都FD開発推進センターの活動の4つの柱〕

1）階層別・分野別のFD研修プログラムの開発と実施
2）ICTシステムを活用した授業支援／ FD活動支援
3）連携大学・短期大学のFD活動への支援と情報提供
4）国内外のFDに関する先進事例の調査・研究と研修

さらに、長年にわたって活動してきた大学コンソーシアム京都・高等教育研究センターの下部組織であるFD研究会の活動を引き継ぐ形で、FDの最新の動向に関するテーマを取り上げて年2回開催しているFDセミナーを、本センターの事業として実施することが求められた。

2. 会議の運営

(1) 京都FD開発推進センター会議

本連携事業の最高意思決定機関であるセンター会議は、各連携大学・短期大学からの代表者1名を構成員として、年3回を定例会として開催している。

2009年度は、3回とも連携運営委員会との合同会議として、4月には年度活動方針、前年度決算報告、予算計画、センター活動予定等を決定、12月には活動報告、会計中間報告、活動予定等を報告、2010年3月には次年度活動方針、予算計画、補助事業後の連携方針等を決定した。

(2) FD連携運営委員会

本連携事業の執行機関である運営委員会は、各連携大学・短期大学のFD委員会やFD部会メンバーを構成員として、8月と12月を除く毎月、計10回開催を常会としている。運営委員長は佛教大学の藤松素子教授・教授法開発室長。

毎月のセンター活動報告と活動予定の承認とともに、行事開催を決定し、連携運営方針について協議している。

(3) 幹事会

年3回のセンター会議、年10回の運営委員会を待たず、迅速な意思決定を必要とする事案に備え、また18大学による連携をよりスムーズに進めるために、幹事校4大学（佛教大学、京都工芸繊維大学、大谷大学・同短期大学部、龍谷大学・同短期大学部）と大学コンソーシアム京都による幹事会を構成した。

2009年度には4月と5月に開催した。

(4) ワーキンググループ

連携大学教職員による3つのワーキンググループ（以下WG）の活動詳細については後述されるが、FDer養成WG9回、FDシステム検討WG10回、FD研修プログラム検討WG11回の定例WG会議の準備、資料作成から記録作成までの事務作業と、それぞれのWGが主催するセミナーや学習会等の運営実務は、FDセンターとコンソーシアム事務局の協働により進められた。

(5) 代表校事務連絡会

代表校である佛教大学の運営委員メンバーとコンソーシアム事務局、FDセンターの三者による運営委員会の事前打ち合わせの場として、6月以降、ほぼ毎月開催してきた。センター会議、運営委員会に提出する議題、資料を確認するとともに、事務手続き等をスムーズに進めるための打ち合わせを行っている。

3. 補助金に関して

1) 平成22年度以降計画に関する調書提出とヒアリングの実施

平成21年12月25日付で文部科学省高等教育局大学振興課大学改革推進室より、標記調書の提出依頼があった。次年度以降の予算要求、補助金基準額を設定する際の参考として、補助事業の進捗状況を確認するとともに、当初計画の実現可能性について把握するために、来年度の事業計画及び所要額の記載が求められた。

年末・年始を挟んだため、代表校事務連絡会により調書記入案を作成し、連携大学にeメールにて了解を得た上で、1月13日に佛教大学を通して提出した。

提出した調書の概要は以下の通り。

(1) H21年12月までの進捗状況

順調に申請時の活動計画を実行しつつあり、効果をあげている。

(2) H22年度の実施計画

H21年までの補助事業の成果を踏まえ、研修プログラム、広報システムの構築、連携活動の評価、SDとの連携等の活動を進めていく。

(3) 平成23年度の事業実施計画

補助事業終了後は、戦略連携3年間の実績を活かし、戦略連携18大学から大学コンソーシアム京都の加盟51大学・短期大学全体が連携するFD事業を展開するための体制を確立する。

2) 平成22年度以降計画に関するヒアリングの実施

平成22年1月21日に文部科学省大学改革推進室の古田室長補佐により、ヒアリングが行われた。八木センター長以下4名で応対したが、先に提出した調書により事業の進捗状況が理解され、準備した想定問答を使うまでもなく、今後の実施計画が了解された。

ただし国全体の全般的な補助金削減の方針により、大学連携支援事業は新規案件を募集しないこと、現在進行中の事業に対しても数十%の削減が予定されていることが示された。

4. 2009年度の実績

1）連携校のニーズ分析,研修プログラム原案検討,システム開発

連携大学FD担当部署へのヒアリングと全教員意識調査（1回目310名、2回目201名）を実施し、連携校のニーズ把握を図ることにより、合同研修プログラムとFD共用システムの整備を行うことができ、教職員の授業改善に対するサポート、連携大学のFD活動支援の体制を作ることができた。

2）FD研修プログラムの作成と編成

FD研修プログラムに関する連携大学及び国内外の大学の調査によって、そこで得られた他大学で行っている手法との比較等を行い、大学連携事業における共通プログラムの開発、共通プログラム評価の在り方を開発し、共通研修プログラムの企画、実施、運営に反映させることができた。

3）国内調査,海外調査の実施

FD先進事例の国内調査、海外調査研修（欧州、豪州、米国、英国）を実施したことにより、連携大学教職員の授業改善やFD活動に対する知識と意欲を喚起することができた。また、研修報告会を開催（10/16：24名参加、3/25：14名参加）し、調査報告書を発行（2回、各1500部発行）したことにより、海外研修で得た知識や手法を連携大学教員間で共有することができた。

4）研修プログラムのモニタリングとレヴュー,FDハンドブックの作成

連携大学教職員による3つのワーキンググループによって研修プログラム案の評価、分析を行なったことにより、研修プログラム、FDシステムの問題点を把握することが可能となった。このことによって、新任教員、FDリーダー等に対する合同研修の充実を図ることができた。新任教員研修プログラムの一環として、マンガによる一問一答形式によりFDハンドブックを作成した。

5）研修の実施運用体制の確立

新任教員合同研修の実施（新任教員19名参加）、FDリーダー養成研修（1回目49名、2回目32名、3回目33名参加）、全教員意識調査のマイニング分析（2回）、SNS運用等を実施したことにより、階層別共通研修プログラムと、連携大学のFD活動への支援体制を構築することができた。

6）研修プログラムの実施,FDハンドブックの配付

FDセミナー、シンポジウム企画（2回）、学習会（5回）、報告会（2回）を開催したことにより、連携大学教職員に学習の機会を提供するとともに、本取組を全国の大学教職員に情報発信し、本補助事業の公表・普及につなげることができた。マンガ版FDハンドブックを連携大学全教員に配付した残部について全国の大学教職員に情報発信したところ700通以上の送付希望があり、本補助事業の公表・普及につなげることができた。

以上

センター活動記録

センター行事

1）第1回FDセミナー

連携大学から理工系大学・学部が設置されている２校に、FDの取り組みを報告していただいた。２つの大学が、多くの教育改善のための活動を、着実に、しかも教員集団として取り組んでいることが報告されたが、それぞれの活動は試行錯誤によって現在の状態になっているのであって、すべての活動は結びついて進んできたとのお話であった。

本連携プロジェクトの中の先進事例を学ぶという趣旨の内容の濃いセミナーとなり、全国から多くの理工系大学、学部の教員、関係者に参加していただいた。

日　時：2009年７月18日（土）　15時～18時
場　所：キャンパスプラザ京都４階　第２講義室
参加者：65名
テーマ：「FD ？からFD ！への実践～連携校の取り組みから学ぶ～」
報告者：森迫清貴氏（京都工芸繊維大学　教授）
　　林　久夫氏（龍谷大学理工学部　教授）
コメンテーター：池田勝彦氏（関西大学化学生命工学部教授・教育開発支援センター長）

森迫清貴氏

林　久夫氏

池田勝彦氏

参加者とのディスカッション

2）第6回全国大学コンソーシアム研究交流フォーラム：分科会企画

京都地域の18大学・短期大学が連携して取り組む点に特徴がある本プロジェクトの活動について、連携大学の現状と問題点を報告するとともに、大学の規模や設置学部等が多様な大学が連携する事業の課題を明らかにし、その可能性について全国の大学関係者、コンソーシアム関係者と議論を深めることができた。

日　時：2009年9月12日
場　所：北海道教育大学函館校（北海道函館市）　　参加者：101名
分科会テーマ：FD・SD事業（大学間連携によるFDの推進）
・戦略的大学連携支援事業「地域内大学連携によるＦＤの包括研究と共通プログラム開発・組織的運用システムの確立」の概要と狙い　：八木　透氏（京都ＦＤ開発推進センター長／佛教大学文学部教授　教学部長）
・WGの取組報告　：松本真治氏（佛教大学文学部准教授）
・「連携型FDの現状と課題」　：原　清治氏（佛教大学教育学部教授・GP推進室室長）
・「連携型FDの理想と期待するもの」：圓月勝博氏（同志社大学文学部教授・教務部長）
・討論・質疑応答コーディネーター　：深野政之（京都FD開発推進センター専門研究員）

八木透氏

左から、深野氏、八木氏、圓月氏、松本氏、原氏

3）第2回FDセミナー

日　時：2009年12月13日（日）14時～17時
場　所：大谷大学　講堂（京都市地下鉄烏丸線　北大路駅すぐ）　　参加者：260名
テーマ：「大学間連携を活かしたFD・SD～より実質的な改善・開発を目指して～」
コーディネーター：深野政之（京都FD開発推進センター専門研究員）
講　演：
「大学間連携を活かしたFD―義と愛のある協働的大学づくりを目指して―」
杉原真晃氏（山形大学高等教育研究企画センター准教授）
「大学間連携を活かしたSD―大学の垣根を越えた職員の相互研鑽を目指して―」
川田正之氏（山形大学高等教育研究企画センター・エリアキャンパスもがみ事務局
ビデオ上映：「あっとおどろく大学授業NG集」「あっとおどろく大学事務NG集」

山形大学を中心としたFD連携事業によるビデオ版授業改善ティップス集と大学職員NG集の制作の取り組みを報告していただいた。ビデオの上映を交え、大学間連携でFDに取り組む際の課題、さらには大学職員の能力開発に大学間連携をどう活かすかといった課題について、全国から来場した参加者と共有することができた。

杉原真晃氏

川田正之氏

ビデオ上映

深野政之専門研究員

4）大学コンソーシアム京都主催FDフォーラム：ミニ・シンポジウム企画

京都地域の3つの大学から副学長に各大学のFD活動の現状と、トップによるFD推進の具体例をご紹介いただいた。指定討論者の池田輝政先生により、3つの大学のそれぞれのFD活動の特徴、スタイルが整理された形で示され、会場参加者とともに大学執行部の役割について検証した。

日　時：3月7日（日）　10：00～15：30　（受付9：30～10：00）
場　所：同志社大学　新町キャンパス
参加者：127名
報告者：清水　　稔氏（佛教大学　副学長）
　　河野　勝彦氏（京都産業大学　副学長）
　　久保　哲男氏（京都外国語大学・京都外国語短期大学　副学長）
指定討論者：池田　輝政氏（名城大学　副学長・理事）
コーディネーター：深野　政之（京都FD開発推進センター専門研究員）

報告者の論点整理

論点	佛教大学 清水稔副学長	京都外語大・短大 久保哲夫副学長	京都産業大 河野勝彦副学長
マネジメントの役割に対する学内認識	◆学びの目線を徹底 ◆組織と執行部を可視化する	◆トップのリーダシップの必要性 ◆全体のカリキュラムと個々の教育内容・方法とを関係づける	◆学長のリーダシップが発揮できる
学生の特徴	入学時の期待大 資格志向 自己抑制的気風		
FDMのコンセプトと出発	◆学習者視点に立つ 1991　教育充実検討小委 1999　FD活動評価検討委 2000　教授法開発室	◆人材が育つ教育・学習環境づくり H7　短大（授業点検アンケートの自主的開始） H10　大学　H13合同 H20　全学体制 H21　もっと時間をかけての声から宿泊型研修開始	◆授業改善の活性化 H10　自己点検・評価運営委員会 H15　教育エクセレンス支援センター H21　授業評価アンケート改革（フィードバックのためのウェブ公開）
FDMの範囲と活動	◆教育・研究・社会貢献 ●入学前教育＋基礎学力調査＋授業アンケート＋授業公開＋e-Learning活用＋TA配置＋シラバス改善 ●FD研修会＋FDレビュー刊行＋教授法開発室だより	◆教育 ●宿泊型＋授業点検アンケート＋学内FD＋学科別FD（非常勤を含む）＋科目群FD＋FD冊子（実施要項・レジュメ・資料集）	◆教育・研究 ●ティーチング・ティップス作成＋全学一斉公開授業＋新任教員ワークショップ＋支援制度＋学生評価アンケート＋講演会＋ニューズレター刊行
FDM推進体制	学部委員が教授会に提案＋教授法開発室＋教育開発課	2つ委員会のコラボレーション	部局長会→教育エクセレンス支援センター→FD推進委員会の執行部決定から教授会に提案
FDM戦略	H19　離脱者ゼロ計画 H18　大学連携型FD	教育理念・ミッションと3ポリシーの具現化 H16+H19　特色GP学習支援・学生支援	活動活性化のための教員評価制度の導入 H20　学部別に本格実施（教員個人の教育・研究・社会貢献）授業評価も組み込む
FDMの課題	・啓蒙段階＋意識改革 ・ボトムアップ型 ・部局ベースの運営 ・研究偏重の評価 ・4年間一貫指導の弱さ ・執行部と教授法開発室 ・教育開発課と現場との双方向	・準備が大変 ・特定の教員にしわよせ ・必要な教員が出席しない ・職員の支援が不可欠 ・データの重要性 ・FDは誰のものかの問い	・全学の形式化 ・学部でのFD活性化 ・学部の教育支援 ・高等教育研究の推進
大学の理念	人間力と共生	言語を通して世界の平和を	

専門研究員・専門調査員の他大学等の行事・研修参加

本センターの専門研究員と専門調査員が、以下の通り他大学等のFD行事や研修に参加した。それぞれの出張について連携運営委員会で承認を受け、全ての出張について報告書が提出された。報告書は本センターHPで公開している。

2009年

5月16日（土）	日本教育工学会研究会 徳島大学
5月23日（土）・24日（日）	日本高等教育学会第12回大会 長崎大学（長崎市）
6月　6日（土）・　7日（日）	大学教育学会第31回大会 首都大学東京（東京都八王子市）
6月27日（土）・28日（日）	比較教育学会第45回大会 東京学芸大学（東京都小金井市）
7月27日（土）	国立教育政策研究所特別シンポジウム 文部科学省・講堂（東京都千代田区）
9月19日（土）・20日（日）	初年次教育学会第2回大会 関西国際大学尼崎キャンパス（尼崎市）
10月10日（土）・11日（日）	ファカルティ・ディベロッパー養成講座 愛媛大学（愛媛県松山市文京町）
10月30日（金）	国際高等教育フォーラム 早稲田大学（東京都新宿区）
11月　7日（土）	高等教育コンソーシアム信州FDフォーラム 信州大学（長野県松本市）
11月21日（土）	第3回大学セミナーハウスFD研究会 日本大学本部（東京都千代田区）

11月28日（土）・29日（日）	大学教育学会課題研究集会 大阪市立大学（大阪市住吉区）
2010年	
1月 9日（土）	青山学院大学第4回現代GPフォーラム 青山学院大学（東京都渋谷区）
1月23日（土）	長崎大学FD・SDシンポジウム　長崎新聞文化ホール（長崎市）
2月22日（月）	金沢大学 大学教育セミナー　金沢大学サテライトプラザ（石川県金沢市）
3月10日（月）	弘前大学・土持先生　ポートフォリオのレクチャー（青森県弘前市）

連携大学教職員の他大学等の行事・研修への派遣支援

連携校・連携機関の教職員に、FDの知識を更に深めていただくため、本センターが推奨するFD関連のセミナー等へ派遣費用支援を行った。2009年度は下表の通り、のべ17名の利用があり、それぞれ参加報告書が提出され、その一部をセンターHPで公開している。

2009年		
6月 6日（土）・ 7日（日）	大学教育学会第31回大会	首都大学東京
6月23日（火）	国立教育政策研究所FD公開セミナー	文部科学省 講堂
6月26日（金）	国際大学戦略セミナー 2009	ホテルパシフィック東京
7月25日（土）	国立教育政策研究所第1回シンポジウム	文部科学省3階講堂
7月25日（土）	青山学院大学現代GPフォーラム	青山学院大学
8月28日（土）・29日（日）	日本教育学会第68回大会	東京大学駒場キャンパス
8月28日（土）・29日（日）	日本教育学会第68回大会	東京大学駒場キャンパス
11月21日（土）	第3回大学セミナーハウスFD研究会	日本大学本部
11月23日（月）	日本学術会議報告会	東京大学安田講堂
2010年		
1月 9日（土）	青山学院大学第4回現代GPフォーラム	青山学院大学
1月23日（土）	長崎大学FD・SDシンポジウム	長崎新聞文化ホール
2月22日（月）	金沢大学 大学教育セミナー	金沢大学サテライトプラザ

広報活動

連携校・連携機関の教職員に対して本センター事業の活動内容を紹介するとともに、全国の大学関係者に対して、本センター事業によるFD連携活動の広報と普及を行った。

『まんがFDハンドブック　おしえてFDマン!』を刊行した際には、新聞、大学関係メーリングリストや学会HP等への投稿・記事提供を重点的に行ったことにより、全国の大学教職員から大きな反響があり、連携大学以外から700通以上の送付希望申し込みを受けた。

■ホームページ・ブログ

センター WEBサイト（http://www.kyoto-fd.jp/）を開設・運営。

京えふでブログ（http://blogs.dion.ne.jp/kyoto_fd/）を開設・運営。

京えふでHP

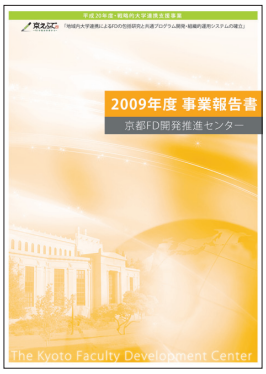
京えふでブログ

■News Letter・報告書

Newsletterの季刊発行：12,000部発行。Vol.4まで発行。

2009年度夏季海外視察報告書：2000部発行（2009年12月）

2009年度事業報告書：1,500部発行（2010年3月）



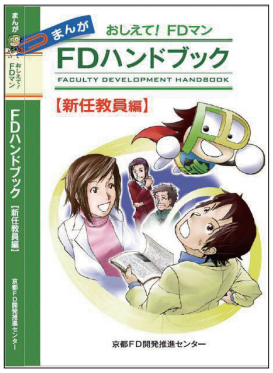
■その他

コンサルテーション広報用ノベルティー（クリアファイル）作成：3,000枚（2010年2月）

『まんがFDハンドブック　おしえてFDマン!』：4,000冊発行（2010年2月）

デジタルブック版『まんがFDハンドブック　おしえてFDマン!』公開（2010年3月）

広報用活動ポスター作成（2010年3月）



広報用活動ポスター

◎新聞記事掲載

2010年2月10日（水）教育学術新聞「FDハンドブックを発刊」
2010年2月17日（水）読売新聞「マンガで学ぶ大学授業法」
2010年3月12日（金）朝日新聞「大学新任教員がSOS…FDマンが助けるよ!」
2010年3月12日（金）大学新聞「新任教員必見!マンガで分かる大学授業法」

FDコンサルテーション活動

連携大学と、連携校の教職員からの質問、支援要請に対応するため、本センターとしてFDコンサルテーションに対応する仕組みを作った。対応件数はまだ少ないが、さらに広報活動を強め、本センターによる対応実績を積むことによって、より効果的なFDコンサルテーションを実施する体制を作り上げることとする。

1）FDQA

2007年度から「大学コンソーシアム京都」京都高等教育研究センターがweb掲示板を開設し、試行的に質問等を受け付けてきた「FDQA」を、2009年度より本センターが受け継いでHPを整備し、運営している。

対応件数：2件

FDに関する基本的な質問に回答するとともに、各大学等が抱える個別の質問等を把握し、可能な限りその質問等に答えられるようにした。

2）授業コンサルテーション

連携大学・短期大学の授業に関わる個別相談に対応できるよう、授業コンサルテーションの受付を始めた。連携校教員の授業の組み立てや授業運営上の悩み等に応じるとともに、当該教員の要望により教室の中に入ってカウンセリングをしたり、授業ビデオの収録や受講学生への聞き取り、授業検討会等を行ったりすることによって、経験豊かな教員、専門家からアドバイスすることにしている。

問い合わせは3件あったが、対応件数は0件。

同じ大学の同僚教員には相談しにくいことでも、他大学の専門家からアドバイスを受けることができる仕組みとしており、場合によっては外部専門家にも参加していただいて、対応実績を重ねることを重視していきたい。

3）研修会講師紹介

連携大学・短期大学のFD活動を支援するため、FDに関するご相談、情報提供を受け付けている。講演会、研修会、シンポジウムやワークショップを企画する際に、そのテーマに詳しい講師を紹介したり、プログラムに関する相談等に応じたりするものである。

対応実績：2件

講師紹介依頼を受けた2校のFD担当者から、充実した内容の研修会ができたとの報告があった。

京都FD開発推進センター会議、FD連携運営委員会記録

第1回センター会議・運営委員会（合同会議）

2009年4月21日（火）18：30～19：45　キャンパスプラザ京都　第2会議室

【議題】今年度の活動の具体案

1. 2009年度メンバーの確認
2. ①2008年度決算報告
   ②2009年度予算報告
3. 当センターミッションの確認
4. 活動方針についての確認
   ①京都地域における研究・活動領域のすみわけについて
   ② 連携校のヒアリング結果について
   ③2009年度の各ワーキンググループの活動内容（案）について
   ④2009年度専門研究員・調査員主導による活動内容（案）について
      1）FDセミナーの実施および企画案
      2）海外視察活動の原案（候補校、その理由、時期）
      3）国内調査および派遣支援について
      4）広報活動についての進捗状況、懸案事項について
   ⑤ 運営委員会の会議日程案

第2回FD連携運営委員会

2009年5月28日（木）18：30～20：00　キャンパスプラザ京都　2階ホール

【議題】

1. 国内イベント派遣支援についてのルールの確認
2. 専門研究員・専門研究員の出張予定・報告
3. 海外視察報告書について
4. 広報進捗状況等について
   a. ホームページ
   b. ニューズレター、封筒、手提げ袋
   c. 当事業の愛称について
5. FDセミナー（7/18）の進捗状況
6. 各WGの進捗状況
   a. FDer検討WG（第1回勉強会「FDer塾」7/6）
   b. FDシステム検討WG
   c. FD研修プログラム検討WG
7. 海外視察について
8. 全国大学コンソーシアム研究交流フォーラムについて

第3回FD連携運営委員会

2009年6月26日（金）18：30～20：30　キャンパスプラザ京都　2階　第3会議室

【報告事項】

1. 広報進捗状況等について
   ホームページ、ニューズレターの発行、「京えふで」ロゴの決定
2. 各WGの進捗状況について（各WGリーダーより）
3. FDセミナー（7/18）の進捗状況
4. 来月以降の研究員・調査員の出張予定

【検討事項】

1. 研究員・調査員の業務出張申請について
2. 海外視察について
3. 全国大学コンソーシアム研究交流フォーラム　「FD・SD」分科会について
4. 京都大学FDネットワーク会議での発表について
5. その他

第4回FD連携運営委員会

2009年7月21日（火）18：30～20：45　キャンパスプラザ京都　2階　第2会議室

【報告事項】

1. 来月以降の研究員・調査員の出張予定
2. 各WGの進捗状況について
   —「第2回FDer塾」開催概要について〈FDer養成WG〉
   —PF_NOTEを利用した授業開発についての報告会の開催〈システム検討WG〉
   —新任教員ハンドブック作成の進捗状況〈FD研修プログラムWG〉
3. 7月18日（土）FDセミナーの実施報告
4. 7月24日（金）夏目先生学習会について
5. 8月7日（金）サイモン・マージンソン先生講演会について

【検討事項】

1. 海外視察について
   —視察メンバーの承認
   —今後の海外視察の実施方法について
2. その他

第5回FD連携運営委員会

2009年9月24日（木）18：30～20：00　キャンパスプラザ京都　2階　第1会議室

【報告事項】

1. 各WG活動進捗状況
2. 学習会実施（3件）
3. 全国大学コンソーシアム研究交流フォーラム、FDネットワーク代表者会議
4. 9/17　「クリッカーシステムを利用した授業実践発表会」

5. 専門研究員・調査員の出張、国内FD研修支援

【検討事項】

1. 第2回京都FDer塾
2. 学会発表、事例報告等の手続について
3. 自己設定型海外視察　運営方法
4. 第2回FDセミナー開催

第2回センター会議・第6回運営委員会（合同会議）

2009年10月23日（金）　18：30～20：30　キャンパスプラザ京都　2階　第1会議室

【報告事項】

1. 運営委員交代（龍谷大学）
2. 専門研究員・調査員の出張
3. 国内FD研修派遣支援
4. FDコンサルテーションの募集
5. 学会発表・論文投稿
6. 海外視察
   - ・2009年度夏季視察報告会
   - ・今年度のアメリカ視察
   - ・自己設定型海外視察「実施要綱・募集要項」
7. 第2回FDセミナー申し込み進捗状況
8. 各WG進捗状況
9. 今年度上半期決算

【検討事項】

1. 来年度の各WG活動計画
2. センターの今年度活動状況と来年度の活動計画
3. 来年度の予算編成方針

第7回FD連携運営委員会

2009年11月24日（火）18：30～20：30　キャンパスプラザ京都　2階　第3会議室

【報告事項】

1. 各WG活動進捗状況
2. 分野別研修（芸術系）について
3. 成果発表申請について
4. 専門研究員・調査員の出張、国内FD研修支援

【検討事項】

1. FDフォーラム企画
2. 2009年度冬季海外視察
3. 来年度予算案

第8回FD連携運営委員会

2010年1月21日（木）18：30～20：15　キャンパスプラザ京都　2階　第2会議室

【報告事項】

1. センター活動報告、今後の行事予定
2. 各WG活動進捗状況
3. 連携大学アンケート（2件）の実施
4. 文部科学省への事業計画調書提出及びヒアリングについて
5. 専門研究員・調査員の出張/研修派遣支援

【検討事項】

1. 海外視察2件について
   - ・アメリカ視察：参加者の確定
   - ・イギリス視察：企画の承認、募集の開始
2. 2011（H23）年度以降のFD連携体制について
3. その他

第9回FD連携運営委員会

2010年2月19日（金）18：30～20：30　キャンパスプラザ京都　2階　第3会議室

【報告事項】

1. センター活動報告、今後の行事予定
2. 各WG活動進捗状況
3. FDハンドブックの刊行、新聞掲載
4. 海外視察調査2件（アメリカ/イギリス）
5. 専門研究員・調査員の出張/研修派遣支援

【検討事項】

1. 来年度補助金について
2. 2011（H23）年度以降のFD連携体制について
3. 学会発表申請
4. 個人情報保護方針について
5. その他

第3回センター会議・第10回FD連携運営委員会（合同会議）

2010年3月18日（木）　18：30～20：10　キャンパスプラザ京都　2階　第1会議室

【報告事項】

1. センター活動報告、今後の行事予定
2. 海外視察報告（自己設定型・イギリス）
3. 各WG活動進捗状況
   - ・FDer養成WG
   - ・FDシステム検討WG
   - ・FD研修プログラムWG

4. 専門研究員・調査員の出張/研修派遣支援

【検討事項】

1. 2009年度事業報告書の作成
2. 2010年度事業計画・予算案
3. 2011年度以降のFD連携体制の方針
4. 外部評価委員の委嘱
5. その他

活動カレンダー

日程	行事・会議
4月	
4月16日（木）	第1回FD連携幹事会
4月21日（火）	クリッカー　デモンストレーション
4月21日（火）	第1回センター会議・第1回FD連携運営委員会
5月	
5月13日（水）	第1回FDer養成WG
5月14日（木）	第1回FDシステム検討WG
5月15日（金）	第1回FD研修プログラム検討WG
5月16日（土）	〔研修出張〕日本教育工学会研究会（徳島大学）
5月22日（金）	第2回FD連携幹事会
5月23日（土）・24日（日）	〔研修出張〕日本高等教育学会大会　長崎大学（長崎市）
5月28日（木）	第2回FD連携運営委員会
6月	
6月6日（土）・7日（日）	〔研修出張〕大学教育学会大会　首都大学東京（東京都八王子市）
6月11日（木）	第2回FDシステム検討WG
6月17日（水）	第2回FDer養成WG
6月19日（金）	第2回FD研修プログラム検討WG
6月25日（木）	True　Teller　デモンストレーション
6月26日（金）	第3回FD連携運営委員会
6月27日（土）・28日（日）	〔研修出張〕比較教育学会大会　東京学芸大学（東京都小金井市）
7月	
7月6日（月）	第3回FDer養成WG
7月6日（月）	第1回京都FDer塾『FDとは?』
7月9日（木）	第3回FDシステム検討WG
7月10日（金）	第3回FD研修プログラム検討WG
7月18日（土）	第1回FDセミナー『FD?からFD!への実践～連携校の取り組みから学ぶ』
7月21日（火）	第4回FD連携運営委員会
7月24日（金）	学習会『いまなぜ新任教員研修プログラムが必要なのか』
7月27日（土）	〔研修出張〕国立教育政策研究所シンポジウム　文部科学省（東京都千代田区）

センター活動記録

日程	行事・会議
8月	
8月4日（火）	学習会『オーストラリアの高等教育改革』
8月5日（水）	第4回FDer養成WG
8月7日（金）	学習会『ヨーロッパの高等教育改革』
8月7日（金）	第4回FD研修プログラム検討WG
8月23日（日）～8月29日（土）	海外視察研修（オーストラリア）
8月23日（日）～8月30日（日）	海外視察調査（ベルギー、スウェーデン）
9月	
9月5日（土）	大学行政管理学会大会　立命館大学（京都市）
9月9日（水）	FDネットワーク代表者会議　京都大学（京都市）
9月12日（土）・13日（日）	全国大学コンソーシアム研究交流フォーラム：分科会企画 『大学間連携によるFDの推進』（北海道函館市）
9月17日（木）	報告会『クリッカーシステムを利用した授業実践発表会』
9月17日（木）	第4回FDシステム検討WG
9月19日（土）・20日（日）	〔研修出張〕初年次教育学会大会　関西国際大学尼崎キャンパス（尼崎市）
9月24日（木）	第5回FD連携運営委員会
9月25日（金）	第5回FD研修プログラム検討WG
9月30日（水）	第5回FDer養成WG
10月	
10月1日（木）	龍谷大学・遊磨正秀先生インタビュー（FDハンドブックの取材）
10月3日（土）	第2回京都FDer塾『授業評価・教員評価』
10月3日（土）	第6回FDer養成WG
10月6日（火）	佛教大学・クリッカー授業実践見学
10月8日（木）	第5回FDシステム検討WG
10月9日（金）	第6回FD研修プログラム検討WG
10月10日（土）・11日（日）	〔研修出張〕ファカルティ・ディベロッパー養成講座 愛媛大学（愛媛県松山市）
10月16日（金）	夏季海外視察調査報告会
10月23日（金）	第2回センター会議・第6回FD連携運営委員会
10月30日（金）	〔研修出張〕国際高等教育フォーラム　早稲田大学（東京都新宿区）
11月	
11月7日（土）	〔研修出張〕高等教育コンソーシアム信州　FDフォーラム 信州大学（長野県松本市）
11月12日（木）	第6回FDシステム検討WG
11月13日（金）	第7回FD研修プログラム検討WG
11月21日（土）	〔研修出張〕大学セミナーハウスFD研究会　日本大学本部（東京都千代田区）
11月24日（火）	第7回FD連携運営委員会
11月24日（火）～12月9日（水）	学生による授業評価アンケートに関する連携大学教員意識調査
11月25日（水）	大谷大学・クリッカー授業実践見学
11月28日（土）・29日（日）	〔研修出張〕大学教育学会課題研究集会　大阪市立大学（大阪市住吉区）

日程	行事・会議
12月	
12月3日（木）	京都橘大学・クリッカー授業実践見学
12月10日（木）	京都光華女子大学事例報告会 「大学での学びをトータルサポートするICTシステムの活用」
12月10日（木）	第7回FDシステム検討WG
12月11日（金）	第8回FD研修プログラム検討WG
12月13日（日）	第2回FDセミナー 『大学間連携を活かしたFD・SD～より実質的な改善・開発を目指して』
12月16日（水）	第7回FDer養成WG
1月	
1月9日（土）	〔研修出張〕青山学院大学現代GPフォーラム　青山学院大学（東京都渋谷区）
1月19日（火）	第9回FD研修プログラム検討WG
1月20日（水）	第8回FDer養成WG
1月21日（木）	第8回FD連携運営委員会
1月23日（土）	〔研修出張〕長崎大学FD・SDシンポジウム　長崎新聞文化ホール（長崎市）
1月26日（火）	学習会『視察調査の為のワークショップ～アメリカ・カリフォルニア州編』
1月28日（木）	第8回FDシステム検討WG
2月	
2月1日（月）	まんがFDハンドブック刊行
2月7日（日）～2月14日（日）	海外視察調査（アメリカ）
2月18日（木）	第10回FD研修プログラム検討WG
2月19日（金）	第9回FD連携運営委員会
2月20日（土）	第3回京都FDer塾『授業コンサルテーション』
	第9回FDer養成WG
2月22日（月）	〔研修出張〕金沢大学・大学教育セミナー 金沢大学サテライト（石川県金沢市）
2月23日（火）～3月4日（木）	海外視察調査（イギリス）
2月25日（木）	第9回FDシステム検討WG
3月	
3月4日（木）～24日（水）	授業改善に関する連携大学教員意識調査
3月7日（日）	FDフォーラム：ミニシンポ企画 『FDを推進、支援するトップマネジメントの役割』
3月10日（水）	〔研修出張〕弘前大学・土持先生 『ポートフォリオ・レクチャー』（青森県弘前市）
3月11日（木）	第10回FDer養成WG
3月13日（土）・14日（日）	新任教員合同研修
3月16日（火）	第11回FD研修プログラム検討WG
3月18日（木）	第3回センター会議・第10回FD連携運営委員会
3月24日（水）	第10回FDシステム検討WG
3月25日（木）	冬季海外視察調査報告会
3月31日（水）	デジタル版FDハンドブック公開

各WG活動記録

FDer養成ワーキンググループ活動記録

WGメンバー

松本　真治	佛教大学	文学部　准教授　［WGリーダー］
榎本　正明	華頂短期大学	准教授
河原地英武	京都産業大学	外国語学部　教授・教育エクセレンス支援センター　副センター長
平山　弓月	京都外国語大学	外国語学部　教授
村上　正行	京都外国語大学	マルチメディア教育研究センター　准教授

〔事務局〕

深野　政之	京都FD開発推進センター	専門研究員
川面　きよ	京都FD開発推進センター	専門調査員
下西　　新	京都FD開発推進センター	事務担当
井上　真琴	大学コンソーシアム京都	副事務局長
中島　弘喜	大学コンソーシアム京都	次長
平井　孝典	大学コンソーシアム京都	主幹
北山　広喜	大学コンソーシアム京都	主幹

2009年度の活動方針

1. **FDer養成のためのワークショップ・テーマの検討**
   - 授業方法の紹介：Ice Breaking、フィードバック法など
   - 授業準備の方法：シラバス作成、教材活用、学内外の学習資源の利用など
2. **ワークショップの成果→文書（パンフレット）化・web化＝FDハンドブック**
3. **連携校の中での先進事例の共有**
4. **座談会の開催**

2009年度のWG活動総括

1）京都FDer塾の開催（3回）

連携大学においてFD活動のリーダーとなる教職員を養成するため、新たにFD委員会メンバーやFD事務担当者になった教職員を主な対象として、ワークショップ形式の定例研修会「京都FDer塾」を行うこととした。2009年度には以下の通り、3回にわたり開催した。

第１回京都FDer塾「FDとは?」

日　時：2009年7月6日（月）18：00～21：00
場　所：京都タワーホテル
講　師：圓月勝博氏（同志社大学）
　　大塚雄作氏（京都大学）
　　原　清治氏（佛教大学）
参加者：49名
《プログラム》
　1）全体勉強会
　2）グループディスカッション

連携大学のFD担当者はFDのベテランから初心者まで多岐に渡るため、(1) 連携18大学のFD担当者の現状を知ること、(2) そのFD担当者間のネットワークを作ることを狙いとして開催した。まず長年にわたり京都地域のFD活動を牽引してこられた3名の先生による「FDとは?」のレクチャー後、4つのグループに分かれて質疑、グループディスカッションを行なった。

圓月勝博氏

原　清治氏

大塚雄作氏

グループディスカッション

第２回京都FDer塾「授業評価・教員評価」

日　時：2009年10月3日（土）14：00 ～ 18：15
場　所：佛教大学 紫野キャンパス
参加者：32名
《プログラム》
1）全体勉強会
1. 原　清治氏：授業評価・教育評価に関する概説・答申等の流れについて
2. 圓月勝博氏：授業評価アンケートの活用（組織的な活用方策）
3. 大塚雄作氏：授業評価アンケートの活用（教員個人による活用方策）
4. 河原地英武氏、森　洋氏：京都産業大学の「教員評価」の取り組み
2）グループディスカッション
A：授業評価アンケートの活用（組織的な活用）
B：授業評価アンケートの活用（個人的な活用）
C：教員評価

教育評価をテーマとして4件の報告と話題提供を受けた後、授業評価の意義、アンケート結果を活用する方法、教員評価のあり方など多彩な問題について、少人数のグループでざっくばらんな話し合いを行なった。

圓月勝博氏

大塚雄作氏

河原地英武氏

森　洋氏

グループディスカッション

ディスカッションの報告

第3回京都FDer塾「FDer養成・授業コンサルティング」

日　時：2010年2月20日（土）13：00 ～ 17：45
場　所：キャンパスプラザ京都2階ホール
講　師：曽田紘二氏（徳島大学大学開放実践センター長　教授）
　　香川順子氏（徳島大学　准教授）
　　田中さやか氏（徳島大学　特任助教）
　　吉田博氏（徳島大学　特任助教）
コメンテーター：大塚雄作氏（京都大学　教授）
参加者：33名
《プログラム》
1）徳島大学全学FD紹介
・「授業コンサルテーション・授業研究会」とは何か？
・授業コンサルタントに必要なスキル・態度とは？
2）ワークショップ
・アイスブレイク「FD川柳」
・模擬授業コンサルテーション・研究会

徳島大学・大学教育開放センターから4名の先生を招いて、ワークショップ形式によるFD研修を実践していただいた。『授業コンサルティング』をテーマとして、参加者がすぐに役立てることのできる実践的なプログラムを体験することができた。

香川順子氏、曽田紘二氏

グループワーク

グループワークの報告

FD川柳の発表
「FDerに　なれる頃には　異動かな」

2）京都FD執行部塾の企画

各大学でFD活動を進めていくにあたって、学長をはじめとする大学執行部によるFDを推進、支援する役割は欠かすことができないとの共通認識のもと、2010年度より定期的に大学執行部研修を行なうことを企画している。

プレ企画として、2009年3月に開催された大学コンソーシアム京都主催FDフォーラムにおいて、ミニシンポジウム「FDを推進、支援するトップマネジメントの役割」を開催し、連携大学から3大学の副学長に自学での事例を報告をいただき、指定討論者の池田輝政先生（名城大学副学長・常勤理事）とともに、各大学のFDと大学執行部の役割を検討した。このことにより大学執行部に対するFD研修の必要性をアピールし、2010年6月に予定している第1回京都FD執行部塾の基盤を作ることができた。

3）学生対象のFDアンケートの検討

連携大学の学生が求めている授業像・授業スタイルに応じたFDコンサルテーションができるFD担当者を養成するため、「学生が求める授業像」を学生アンケートによって明らかにしたいとの提案があり、数度にわたってWGによる検討を行なった。検討の中で次のような課題が指摘され、実施には至っていない。

・学生アンケートの場合、大学規模、学部、理系文系等の属性の違う学生から回収したアンケートデータに信憑性があるのか
・実施の協力が得られるか。誰に依頼をするのか。
・「学生が求める授業像」を引き出す設問の設計
・システムWGとの連携（マークシート方式ではシステムWGとの連携は不可能）

WG検討議題

第1回FDer養成WG
2009年5月13日（水）19：00～21：00　キャンパスプラザ京都1階　役員応接室
【議題】
1. 2009年度WGメンバーについて（確認）
2. 各メンバーへの簡単なヒアリング（この連携プロジェクトに期待すること等）
3. FDer検討WGのミッションの確認
4. 今後のWGの運営について（スケジュール等）
5. その他

第2回FDer養成WG
2009年6月17日（水）19：00～21：00　キャンパスプラザ京都5階　第2共同研究室
【承認事項】
1. 前回FDer養成WG　議事録確認
【報告事項】
2. FDセミナー（7/18）開催について
3. ニューズレター発行、センターHPの始動について
4. 連携PJ運営委員会（5/28）報告
5. 他WG進捗状況報告
【検討事項】
6. 「第1回京都FDer塾」開催概要・広報活動・具体的な内容について
7. 「第2・3回京都FDer塾」開催時期、概要について
8. 「管理職のためのFD講座」「アンケート調査」について
9. その他

第3回FDer養成WG
2009年7月6日（月）21：30～22：30　京都タワーホテル喫茶室
【承認事項】
1. 前回FDer養成WG　議事録確認

【検討事項】

1. 「第2回京都FDer塾」開催内容について
2. 第4回FDer養成WGの開催について
3. その他

第4回FDer養成WG

2009年8月5日（水）15：00～17：00　キャンパスプラザ京都　1階　役員応接室

【承認事項】

1. 前回FDer養成WG　議事録確認

【報告事項】

2. 「第1回京都FDer塾」アンケート結果報告

【検討事項】

3. 「第2回京都FDer塾」プログラム内容について
4. 「第3回京都FDer塾」プログラム内容について
5. 次年度の業務推進の方向性について
6. その他

第5回FDer養成WG

2009年9月30日（水）19：00～21：00　キャンパスプラザ京都　1階　役員応接室

【承認事項】

1. 第4回FDer養成WG　議事録確認
2. 他WGの進捗状況

【報告事項】

3. 「第2回京都FDer塾」当日運営体制について

【検討事項】

4. 「第3回京都FDer塾」企画内容について
5. 次年度における「FDer養成WG」の方向性について
6. その他（次回の開催について）

第6回FDer養成WG

2009年10月3日（土）20：00～21：00　佛教大学

【検討事項】

1. 第5回FDer養成WG　議事録確認
2. 「第3回京都FDer塾」企画内容について
3. 次年度における「FDer養成WG」の方向性について
4. その他（次回の開催について）

第7回FDer養成WG

2009年12月16日（水）18：00～20：00　キャンパスプラザ京都　1階　役員応接室

【検討事項】

1. 第6回FDer養成WG　議事録確認
2. 「第3回京都FDer塾」プログラム内容について【確定】
3. FD執行部塾の開催について
4. 次年度における「FDer養成WG」の方向性について【確定】
5. その他（次回の開催について）

第8回FDer養成WG

2010年1月20日（木）18：00～19：45　キャンパスプラザ京都　1階　役員応接室

【報告事項】

1. 文部科学省への計画調書提出、ヒアリングについて
2. 第7回FDer養成WG　他WG議事録確認
3. 「第2回京都FDer塾」アンケート結果

【検討事項】

4. 「第3回京都FDer塾」プログラム内容について【確認】
5. FD執行部塾の開催について
6. その他（次回の開催について）

第9回FDer養成WG

2010年3月11日（木）12：00～13：40　キャンパスプラザ京都　1階　役員応接室

【報告事項】

1. 第8回FDer養成WG　他WG議事録確認、他WG進捗状況報告
2. 次年度活動方針、2011年度以降の運営体制について
3. 「第3回京都FDer塾」アンケート結果
4. 2010年度　FDer養成WGの活動方針について

【検討事項】

5. FD執行部塾の開催について
6. FDer塾の開催について
7. その他（次回の開催について）

各WG活動記録

FD研修プログラム検討ワーキンググループ活動記録

WGメンバー

林　久夫	龍谷大学	理工学部　教授　［WGリーダー］
辻野　嘉宏	京都工芸繊維大学	総合教育センター 教授
梶谷　佳子	京都橘大学	看護学部　准教授
河野　良平	京都橘大学	現代ビジネス学部　講師
髙橋　伸一	京都精華大学	人文学部　教授・共通教育センター長
左右田昌幸	種智院大学	人文学部　教授・教務部長
圓月　勝博	同志社大学（大学コンソーシアム京都）	文学部　教授・教務部長

〔事務局〕

中山　類	種智院大学	教務課
深野　政之	京都FD推進センター	専門研究員
川面　きよ	京都FD推進センター	専門調査員
下西　新	京都FD推進センター	事務担当
井上　真琴	大学コンソーシアム	副事務局長
中島　弘喜	大学コンソーシアム	次長
平井　孝典	大学コンソーシアム	主幹
北山　広喜	大学コンソーシアム京都	主幹

2009年度の活動方針

1. 新任研修プログラムの開発

・集合研修：講演、ワークショップ、分野別研修
・ハンドブック配布
・ピア・サポート（各大学に取り組みを奨励）
・SNSの活用：事例紹介（取材）、ミニアンケート、情報交換、ピア・レビュー

2. ハンドブック作成（新任教員対象：配布は連携校すべて）

・授業設計、コース・デザイン
・授業Tips

3. 分野別研修（主に理系・芸術系学部、学科を想定）

・参加校の募集、ニーズ確認
・先進事例のResearch
・Good Practiceの共有

夏目達也氏

遊磨正秀氏

2009年度のWG活動総括

1）新任合同研修プログラムの開発

京都地域の大学新任教員の教育活動面をサポートすることを目的として、新任教員に対して合同研修のプログラム開発を行ない、まず2009年度には試行段階として第1回合同研修を実施することとした。新任教員研修は、多くの連携校がすでに自大学内で実施しているが、それぞれの大学で実施している研修を補う役割として合同研修を位置付け、合わせて京都地域の多くの大学の新任教員が交流する場とした。

研修内容は、国立教育政策研究所のFDerグループ「新任教員研修プログラムの基準枠組」を参考として、土曜日午後と日曜日全日の日程案で検討を進めて、実施した。2010年度以降には年2回実施することによって基準枠組の全項目を網羅する体系的な研修プログラムとできるよう、計画している。

かなり余裕を持った研修スケジュールを組んだことにより研修効果を挙げることができ、新任教員、スタッフともに好評であった。参加者アンケートでは全員から「とても満足」「満足」との評価を得ており、特段のクレームはなかった。

残念だった点として、全体の自己紹介が無かったことが挙げられた。本来は情報交換会で行なうものとして予定していたが、情報交換会参加者が少なかったことによりできなかった。京都地域の新任教員が交流する場という観点からは、次回以降の情報交換会の持ち方を検討する必要があるとの総括をWGで行なった。

第1回新任教員合同研修

日　時：2010年3月13日（土）　13：00～17：45
　　2010年3月14日（日）　10：00～16：45
場　所：キャンパスプラザ京都　2階ホール
参加者：新任教員19名（13日17名、14日17名）、講師・スタッフ18名

井上真琴氏

グループワーク

1日目スケジュール

13：00	開会あいさつ：挨拶・研修目的の説明	林　久夫　WGリーダー
13：10 ～ 13：40	(1) -① 京都の大学、大学のまち京都	【講師】井上真琴　副事務局長 大学コンソーシアム京都
13：40 ～ 15：00	(1) -② 自己紹介・グループワーク ・「あなたの理想の授業」を絵に描いて下さい。 ・描いた絵の説明をしながら自己紹介をする。 ・リーダーと報告者を決める。	【司会】深野政之　専門研究員 【ファシリテータ】 林久夫・高橋伸一 左右田昌幸・梶谷佳子
15：00 ～ 15：30	休憩（描いた絵の優秀作発表）	
15：30 ～ 16：10	(2) -① 授業デザインのための基礎知識	【講師】沖　裕貴　教授 立命館大学 【ファシリテータ】 林久夫・高橋伸一 左右田昌幸・梶谷佳子
16：10 ～ 17：30	(2) -② ワークショップ ・授業の「到達目標」の事例について、問題点を指摘し、正しく書き直してください。また、どの領域・観点の到達目標で書き直したか明らかにしてください。	
18：00 ～ 19：30	情報交換会	

沖　裕貴氏

授業デザイン・ワークショップ

2日目スケジュール

9：40 ～ 10：40	(3) -① 模擬授業①	梅本 裕 教授 京都橘大学理事長 藤原 学 教授 龍谷大学
10：40 ～ 11：40	(3) -① 模擬授業②	
11：40 ～ 12：30	(3) -② グループディスカッション 《テーマ》授業改善	【ファシリテータ】 林久夫・高橋伸一・左右田昌幸 梶谷佳子・辻野嘉宏
12：30 ～ 13：30	休憩	
13：30 ～ 14：30	(4) -① 成績評価の基礎知識	【講師】圓月勝博 教授 同志社大学教務部長 【ファシリテータ】 林久夫・高橋伸一・左右田昌幸 梶谷佳子・辻野嘉宏
14：30 ～ 15：30	(4) -② ワークショップ② ・PPTの事例を見て、各自がワークシートに記入する。記入した内容をグループでシェアする。 ①あなたの想定している科目と到達目標を述べてください。 ②コクボくんとミホちゃんに最終成績をつけてください。 ③コクボくんとミホちゃんからクレームが出されました。あなたの成績評価基準を明示して、最終評価に関する説明責任を果たしてください。	
15：30 ～ 16：00	休憩	
16：00 ～ 16：30	(4) -③ ワークショップ②の報告	各グループ報告者
16：30 ～ 16：45	修了証授与式・閉会あいさつ	林 久夫 WGリーダー

梅本 裕氏

藤原 学氏

圓月勝博氏

成績評価ワークショップ

2）新任教員FDハンドブックの作成

新任教員を対象にした研修プログラム開発の一環として、FDハンドブックを作成して連携大学の全教員に配布することを企画した。新任の教員が赴任した大学・短期大学において、スムーズに教育研究を開始しキャリアを重ねていくために、まず日々の授業を円滑かつ効果的に進めるための授業のコツ（ティップス）に焦点を当てることにした。

体裁はハンドブックの利点を大切にし、一問一答の形式を基本とする一方、表現法は連携校である京都精華大学の事業推進室（京都国際マンガミュージアム）の協力によりマンガによる**FDティップス集**という新機軸を打ち出すこととした。

作成スケジュール

6月19日（金）	第2回WGでFDハンドブックをマンガ版で作成する提案
7月7日（金）	京都国際マンガミュージアムで、京都精華大学事業推進室と打ち合わせ
7月10日（金）	第3回WGでマンガ版FDハンドブックの作成を決定
7月24日（金）	夏目達也先生講演会『いまなぜ新任教員研修プログラムが必要なのか』
8月7日（金）	第4回WGで設問項目を決定。記述ページの分担。 回答案の作成、記述ページの作成
9月25日（金）	第5回WGで回答案の検討。
10月1日（木）	作画者と龍谷大学瀬田校地を訪問。遊磨正秀教授にインタビュー、研究室・授業見学。
10月9日（金）	第6回WGで記述ページメンバー分担部分の承認。絵コンテの承認。
11月13日（金）	第7回WGでレイアウト決定。記述ページ研究員作成分承認。
12月11日（金）	第8回WGでハンドブックの表紙と名称を決定。「授業デザインの基礎知識」原稿の検討。
1月19日（火）	第9回WGでゲラ刷り最終確認。発行部数（3000冊）の承認。
2月1日（月）	刊行。連携校への配付、全国への広報開始。
2月18日（木）	第9回WGで増刷決定。新聞掲載により全国から送付希望。
3月末	電子ブックの公開

FDマン

WG検討議題

第1回FD研修プログラム検討WG
2009年5月15日（金）19：00～20：15　キャンパスプラザ京都5階　第2共同研究室
【議題】
1. 2009年度WGメンバーについて（確認）
2. WGメンバーへの簡単なヒアリング（この連携プロジェクトに期待すること等）
3. WGの任務と活動内容について　資料1
4. 新任教員向けパンフレットの作製について　資料2
5. 新任教員合同研修の実施について　資料3
6. その他
   ・ピア・サポート（メンター制度）について
   ・分野別研修について

第2回FD研修プログラム検討WG
2009年6月19日（金）19：00～21：00　キャンパスプラザ京都5階　第2共同研究室
【報告事項】
1. 第1回京都FDer塾（7/6）、FDセミナー（7/18）開催について
2. ニューズレター発行、センターHPの始動について
3. 連携PJ運営委員会（5/28）報告
4. 他WG進捗状況報告

【検討事項】
1. 新任教員ハンドブックについて
2. 新任教員研修に関する学習会の開催について
3. SNSの活用について
4. その他

第3回FD研修プログラム検討WG
2009年7月10日（金）19：00～20：20　キャンパスプラザ京都5階　第2共同研究室
【報告事項】
1. FDセミナー（7/18）、サイモン・マージンソン先生（メルボルン大学教授）学習会（8/7）開催
2. 連携PJ運営委員会（6/26）報告
3. 他WG進捗状況報告
   a. FDer養成WG：第1回京都FDer塾報告、管理職向け研修、今後のFDer塾開催等
   b. システムWG：テキストマイニング・デモ実施、クリッカー授業実践報告、SNS運用等

【検討事項】
1. 新任教員ハンドブックについて
2. 新任教員研修に関する学習会（7/24夏目先生）について

3. SNSの活用について
4. 今後のWGの開催日について
5. その他

第4回FD研修プログラム検討WG
2009年8月7日（金）19：00～21：00　キャンパスプラザ京都5階　第2共同研究室

【報告事項】
1. 新任教員研修に関する学習会〈7/24夏目達也先生（名古屋大学教授）〉報告
2. 中島英博先生（名城大学准教授）学習会（8/4）、サイモン・マージンソン先生（メルボルン大学教授）講演会（8/7）報告
3. 他WG進捗状況報告
   a. FDer養成WG：第2回京都FDer塾企画、今後のFDer塾開催等
   b. システムWG：クリッカー授業実践報告、SNS運用等

【検討事項】
1. 新任教員ハンドブックについて
   a. マンガのイメージ
   b. 記述部分の分担
2. 新任教員研修について
   a. 目的、対象者、日程等
   b. プログラム案
3. その他

第5回FD研修プログラム検討WG
2009年9月25日（金）19：00～20：25　キャンパスプラザ京都5階第1共同研究室

【報告事項】
1. 夏季海外視察（ヨーロッパ、オーストラリア）報告
2. FDネットワーク代表者会議、全国大学コンソーシアム交流集会報告
3.「クリッカーシステムを利用した授業実践発表会」報告
4. 他WG進捗状況報告
   ・FDer養成WG：第2回京都FDer塾（10/3）準備状況、今後のFDer塾開催等
   ・システムWG：クリッカー授業実践報告会（9/17）、アンケートシステム等

【検討事項】
1. 新任教員ハンドブックについて
   a. 龍谷大学瀬田校地訪問報告（延期）
   b. 絵コンテおよび作画の進捗について
   c. 分担した記述部分について
2. 新任教員研修について
   a. プログラム案

b. 開催日の確定
c. 講師依頼
3. その他

第6回FD研修プログラム検討WG
2009年10月9日（金）19：00～20：30　キャンパスプラザ京都　1階　役員室
【報告事項】
1. 他WG進捗状況報告
・FDer養成WG：第2回京都FDer塾（10/3）実施報告、今後のFDer塾開催等
・システム検討WG：クリッカー授業実践、アンケートシステム等
2. 2009年度第5回運営委員会（9/20）での決定事項
【検討事項】
1. 新任教員ハンドブックについて
a. 龍谷大学瀬田校地訪問（10/1）
b. 絵コンテおよび作画の進捗について
c. 分担した記述部分について
2. 新任教員研修実施案
a. 講師の依頼について
b. 連携大学の新任教員採用数
3. その他

第7回FD研修プログラム検討WG
2009年11月13日（金）19：00～20：30　キャンパスプラザ京都　5階　第2共同研究室
【報告事項】
1. 2009年度第2回センター会議＆第6回運営委員会（10/24）報告
a. FDコンサルテーションの募集
b. 自己設定型海外・国内視察の募集
2. 他WG進捗状況報告
a. FDer養成WG：執行部塾、学生アンケート他
b. システム検討WG：クリッカー授業実践、アンケート他
【検討事項】
1. 新任教員ハンドブック
a. 第1章（1）と残り9枚について
b. 記述部分について
c. マンガページのレイアウト案
d. ハンドブックの名称
2. 新任教員研修
a. 講師の確定

b. ワークショップの内容について
c. ファシリテーターについて
3. その他

第8回FD研修プログラム検討WG
2009年12月11日（金）19：00～19：50　キャンパスプラザ京都　5階　第2共同研究室
【報告事項】
1. 2009年度第7回運営委員会（11/24）報告
2. 他WG進捗状況報告
・システム検討WG：光華システム報告会、連携校アンケート他
【検討事項】
1. 新任教員ハンドブック
a. ハンドブックの表紙と名称
b. マンガページ
c.「授業デザインの基礎知識」原稿
d. その他の記述部分
2. 新任教員研修
・講師の確定・・・「京都の大学、大学のまち京都」

第9回FD研修プログラム検討WG
2010年1月19日（火）19：00～20：35　キャンパスプラザ京都　5階　第2共同研究室
【報告事項】
1. 文部科学省への計画調書提出、ヒアリングについて
2. FDセミナー実施、海外視察報告書刊行など
3. 連携校アンケート実施
4. 冬季海外視察〔自己設定型〕応募案
5. 他WG進捗状況報告
・FDer養成WG：第3回京都FDer塾（2/20）、京都執行部塾企画
【検討事項】
1. 新任教員ハンドブック（最終確認）
・ハンドブックの表紙
・再校原稿
・来年度発行のハンドブックについて
2. 新任教員合同研修
・参加者募集
・グループワーキング
・来年度の企画、研修体系について
3. その他

第10回FD研修プログラム検討WG

2010年2月18日（木）19：00～20：20　キャンパスプラザ京都　1階　役員応接室

【報告事項】

1. 第8回連携運営委員会報告（1/21）
2. 他WG進捗状況報告
   - ・システム検討WG：第2回全教員アンケート、SNSの検討について
   - ・FDer養成WG：第3回京都FDer塾（2/20）、京都執行部塾企画
3. 海外視察調査の実施
4. 来年度補助金の削減について
5. ハンドブック刊行、新聞掲載

【検討事項】

1. 来年度発行のハンドブック
2. 新任教員合同研修
   - ・参加者募集
   - ・グループワーキング
3. その他

各WG活動記録

FDシステム検討ワーキンググループ活動記録

WGメンバー

深田　　守	京都薬科大学	情報処理教育研究センター　教授［WGリーダー］
行廣　隆次	京都学園大学	人間文化学部　准教授
髙井　康弘	大谷大学	文学部　教授
酒井　浩二	京都光華女子大学	人間科学部　准教授
坂井美也子	池坊短期大学	環境文化学科　専任講師
小林加代子	池坊短期大学	文化芸術学科　専任講師
大塚　雄作	京都大学（大学コンソーシアム京都）	高等教育研究開発推進センター　教授

〔事務局〕

深野　政之	京都FD開発推進センター	専門研究員
川面　きよ	京都FD開発推進センター	専門調査員
下西　　新	京都FD推進センター	事務担当
井上　真琴	大学コンソーシアム京都	副事務局長
中島　弘喜	大学コンソーシアム京都	次長
平井　孝典	大学コンソーシアム京都	主幹
北山　広喜	大学コンソーシアム京都	主幹

2009年度の活動方針

1. FD共用システム・アプリケーションの開発・提供

- FD共用システム等の開発と運用
- 新たに開発するFDプログラムのモデル作成と実施検証のコーディネート
- ティーチング・ポートフォリオの検討

2. システム・アプリケーション開発への参画

テスト運用の際のユーザー参加・フィードバック

>True Tellerの活用方法検討

・サンプルデータを利用してのデモ開発

・有効利用方法

>クリッカー等のICTを利用した授業開発

>SNS階層設計/利用ルールの検討・テスト運用

>コンサルテーションへの活用

2009年度のWG活動総括

1）SNSの開発と活用

京えふでSNS

本プロジェクト発足当初には、SNSを利用して連携大学・短期大学の授業評価アンケートを共通・合同実施することを企図し、オープンソースのSNSエンジンにアンケート機能、利用者データ一括取り込み機能などを実装するシステム開発を構想していた。実際にシステム運用会社により、アンケート機能、利用者データ一括取り込み機能開発を進め、テスト運用を開始している。

しかしWG発足時より、SNSを利用して授業評価アンケートを実施することに多くのWGメンバーが否定的であり、また連携大学のFD担当部署に対するアンケート（2009年10月実施）においても、授業評価アンケートの共通化・合同実施には否定的な意見が多く、積極的に賛成する意見は皆無であった。

これらの結果を踏まえて、既に導入作業を終え、試験運用を開始している「京えふでSNS」をどのように活用するかがWGの検討課題となった。テスト運用として本プロジェクト参加教職員に限っていたSNSメンバーを、連携大学教職員全員に拡げ、現メンバーによる新規メンバーの招待制を取り入れた。学生にも対象を拡げることについて議論を行なったが、当面は『京都地域の大学教職員』に対象を限定することとしている。

2010年3月よりシステム運用会社に委託して、毎日の大学関連ニュース配信とコミュニティー活性化支援、「はじめてページ」の作成を行なっている。SNSは内容の充実と利用者増とが鶏と卵の関係と言われるが、まず内容を充実させることにより、同僚教員や友人を誘いたくなる「京えふでSNS」を目指して、さらなる努力が必要である。

2）クリッカー・授業収録装置による授業支援の実践

クリッカーを使った授業

2008年度に導入したPF-NOTEシステムと、その簡易版であるEduClickシステムを利用して、2009年度は4大学の7つの授業において授業実践（試用）を実施した。

具体的な使用方法、成果については、4名の授業担当者による報告（59～91ページ参照）に詳述されているが、学生の授業参加意識が高まったこと、教員自身の振り返り（リフレクション）に効果があることなどの成果が報告されている。

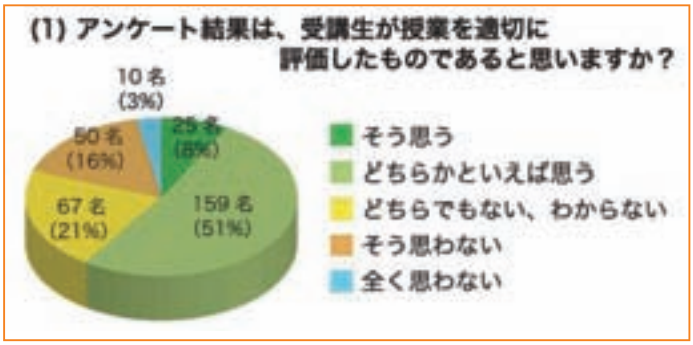
また、授業担当者のうち2名は、2009年8月に実施したオーストラリア視察研修に参加したメンバーであり、本プロジェクトの取り組みが相乗効果を挙げていることが実証されている。

3）連携大学全教員意識調査の実施（2回のWEBアンケートとアンケート回答分析）

放送大学ICT活用・遠隔教育センター（旧メディア教育開発センター）のWEB アンケートシステムREAS（リアルタイム評価支援システム）を利用して、2009年12月と2010年3月に全教員意識調査を行なった。

全教員意識調査の集計結果と本WGによる分析については52～58ページを参照していただきたいが、1回目は「学生による授業評価」に対する教員の意識を問うもので311名（回答率約14%）から回答を得た。1回目の回答分析結果を受け、2回目には「授業改善」をテーマに意識調査を行ない201名（回答率約8%）から回答を得ることができた。

本WGによるWEBアンケートの実施は、WEBアンケートシステムの試用と自由記述回答のテキストマイニングによる分析というシステム検証を行ないたいという第一の目的に加え、FD連携プロジェクトとして連携大学教員のFD全般に対する意識調査を実施したいという第二の目的の二兎を追ったものであったが、多くの連携大学教員に協力をいただいた結果、WEBアンケートとしては一定の回答率を得ている。ただし、連携大学全教員約2,300名に対して200～300名の回答者数は十分ではなく、また「授業評価」や「授業改善」に関心のある教員のみが回答している可能性も捨てきれない。連携大学の担当者とも協力をして、次回以降、回答者数を増加させる努力が必要である。



第1回教員意識調査結果より

4）eポートフォリオの実態調査

教育・学習に関する業績・履歴を記録し共有することによる振り返り（リフレクション）を目的とした教育ポートフォリオ、学習ポートフォリオの活用が多くの大学で始まっている。近年では特にコンピュータを活用したeポートフォリオシステムを導入する大学も増えてきており、このシステムについて事例報告と実態調査を行なった。

2009年12月には、連携大学である京都光華女子大学が導入している「光華navi」の事例報告会を開催し、学生全員を対象とした統合システム環境の提供と、その中に含まれる教育・学習支援システムについて説明を受けた。

また、2009年3月に弘前大学の土持ゲーリー法一教授を訪ね、ポートフォリオの目的と活用法、土持先生の授業における実践に関する聞き取り調査を行なった。

さらに2009年3月にはシステム運用会社に「eポートフォリオ実態調査」のレポート作成を委嘱し報告を受けた。

京都光華女子大学事例報告会

こうした調査結果を連携大学・短期大学に対して報告することにより、各大学がポートフォリオの導入を検討する際に、参考資料として活用していただくことを期待している。

WG検討議題

第1回 FDシステム検討WG
2009年5月14日（木）18：30～　キャンパスプラザ京都5階第1共同研究室
【議題】

1. 2009年度WGメンバーについて（確認）
2. システム検討WGのミッションの確認
3. 活動内容について

—これまでの経過

・2009年12月16日（火）2008年度第1回FD研修プログラム検討／FDシステム検討WG合同会議
・2009年1月27日（火）2008年度第2回FDシステム検討WG会議

—システムの説明

・True Teller（テキストマイニング）
・PF-NOTE（クリッカー＋授業収録装置）
・SNS&Webアンケート機能

—各システムの開発の進め方について
—その他のシステムの導入検討について

4. 今後のWGの運営について（スケジュール等）

第2回 FDシステム検討WG
2009年6月11日（木）18：30～　キャンパスプラザ京都5階第4演習室
【議題】

1. 各WGでの第1回の議論の内容について（報告）
   a. FDer検討WG：7/6　京都FDer塾開催等
   b. FDプログラム検討WG：初任者向けハンドブックの作成等
2. 2009年度運営委員会での決定事項について（報告）
3. 活動内容について（協議）
   a. TrueTeller（テキスト・マイニング）について：研修報告
   b. PF-NOTEについて：授業開発の進捗
   c. SNS：運用ルールの策定
      ・管理者／利用者について、
      ・登録情報について
      ・SNSサイトの位置づけについて
      ・開発／活動計画について

4. 今後のWGの開催日について
5. その他

第3回 FDシステム検討WG
2009年7月9日（木）18：30～20：30　キャンパスプラザ京都5階第1共同研究室
【議題】
1. 各WGでの第2回の議論の内容について（報告）
   a. FDer検討WG：7/6　京都FDer塾、管理職向け研修、FDer塾の今後の活動内容
   b. FDプログラム検討WG：初任者向けハンドブックの内容、新任研修等
2. 2009年度第3回運営委員会での決定事項について（報告）
3. 活動内容について（協議）
   a. TrueTeller（テキスト・マイニング）について：デモ感想、今後の活用方法について
   b. PF-NOTEについて：第1回授業実践報告
   c. SNS：
      ・トップページデザインについて
      ・サイト活性化案from凸版
      —ニュース等とのマッシュアップ
      —書き込みページ設置
      —エデュケーション・マップ
4. 今後のWGの開催日について
5. その他

第4回 FDシステム検討WG
2009年9月17日（木）18：30～20：30　キャンパスプラザ京都6階京都学園大学サテライト
【授業実践発表】
クリッカーシステムを利用した授業実践発表
【議題】
1. 各WGでの第3回の議論の内容について（報告）
   a. FDer検討WG：10/3　京都FDer塾、管理職向け研修、FDer塾の今後の活動内容
   b. FDプログラム検討WG：初任者向けハンドブックの内容、新任研修等
2. 2009年度第4回運営委員会での決定事項について（報告）
3. 活動内容について（協議）
   a. 今後の活動の進め方についての提案
   b. 目標と達成すべき成果について
      ・WEBアンケートシステム：導入の是非およびテスト使用・開発の手順について
      ・TrueTeller：WEBアンケート結果の分析で活用
      ・SNS：会員招待のOPEN化、オリジナル・アイコンの作成
      ・PF-NOTE：後期の授業実践希望について／リモコン追加レンタルについて

・Keepad社製品の検討について
・その他のシステム（LMS/e-portfolio）の検討について

4. その他

第5回FDシステム検討WG
2009年10月8日（木）18時30分～20時10分　キャンパスプラザ京都5階第4演習室

【報告事項】

1. 他WG進捗状況報告
   a. FDer養成WG：第2回京都FDer塾（10/3）実施報告、今後のFDer塾開催、アンケート等
   b. FD研修プログラムWG：初任教員ハンドブック、新任教員研修等
2. 2009年度第5回運営委員会（9/20）での決定事項
   a. 成果発表等の手続き
   b. 自己設定型海外・国内視察について

【検討事項】

1. WEBアンケートシステム
2. TrueTeller
3. PF-NOTE（クリッカー）
4. SNS
5. その他

第6回FDシステム検討WG
2009年11月11日（木）18時30分～20時25分　キャンパスプラザ京都5階第4演習室

【報告事項】

1. 2009年度第2回センター会議＋第6回運営委員会（10/24）報告
   a. FDコンサルテーションの募集
   b. 自己設定型海外・国内視察の募集
2. 他WG進捗状況報告
   a. FDer養成WG：学生アンケート他
   b. FD研修プログラムWG：初任教員FDハンドブック、新任教員研修
3. SNSのDB異常について
4. PF-NOTE（佛教大学）、クリッカー授業実践（大谷大学）
5. TrueTeller試用

【検討事項】

1. 授業評価担当者対象アンケート
2. 連携校教職員対象アンケート
3. SNSについて
4. eポートフォリオについて
5. その他

第7回FDシステム検討WG

2009年12月10日（木）18時30分～20：50　キャンパスプラザ京都5階第1共同研究室

【事例報告会】

大学での学びをトータルサポートするICTシステムの活用：京都光華女子大学の事例

【報告事項】

1. 2009年度第7回運営委員会（11/24）報告
   a. FDフォーラム分科会（3/7）企画について
   b. 自己設定型海外・国内視察の募集
   c. 来年度の予算編成について
2. 他WG進捗状況報告
   a. FD研修プログラムWG：初任教員ハンドブック、新任教員研修
3. SNSのDB異常について
4. SNS（アニメGIF）について
5. クリッカー授業実践（京都橘大学）

【検討事項】

1. 授業評価担当者対象アンケート結果検討
2. 連携校教職員対象アンケート結果検討
3. SNS課題と施策案

第8回FDシステム検討WG

2009年1月28日（木）18時30分～20時10分　キャンパスプラザ京都5階第4演習室

【報告事項】

1. センター活動報告、今後の予定
2. 2009年度第8回運営委員会（1/21）報告
3. 文部科学省への計画調書提出、ヒアリングについて
4. 冬季海外視察調査〔自己設定型〕の募集
5. 他WG進捗状況報告
   a. FD研修プログラムWG：新任教員ハンドブック発行、新任教員合同研修（3/13,14）
   b. FDer養成WG：第3回FDer塾（2/20）参加者募集、京都執行部塾企画案
6. クリッカーに関する話し合い（1/22静岡大学から来訪）

【検討事項】

1. 連携校全教員対象アンケート結果分析
2. 次の連携校全教員対象アンケート案
3. 連携校職員対象アンケートについて
4. SNSの検討について
5. eポートフォリオについて
6. その他

第9回FDシステム検討WG

2010年2月25日（木）18時30分～20時20分　キャンパスプラザ京都5階第1共同研究室

【報告事項】

1. センター活動報告・活動予定
2. 第9回連携運営委員会報告（2/19）
3. 他WG進捗状況報告
   - ・FDer養成WG：第3回京都FDer塾（2/20）、京都執行部塾企画
   - ・FD研修プログラムWG：初任教員ハンドブック発行、新任教員合同研修（3/13,14）
4. FDハンドブック刊行、新聞掲載
5. 海外視察調査の実施
6. 来年度補助金の削減について
7. 個人情報保護方針

【検討事項】

1. 連携校全教員対象アンケート結果分析
2. 第2回連携校全教員対象アンケート案
3. eポートフォリオ調査委託について
4. その他

第10回FDシステム検討WG

2010年3月24日（水）18時30分～19時55分　キャンパスプラザ京都5階第2共同研究室

【報告事項】

1. センター活動報告・活動予定
2. 第3回センター会議、第10回連携運営委員会（3/18）報告
3. 他WG進捗状況報告
   - ・FDer養成WG：京都執行部塾企画、来年度の京都FDer塾について
   - ・FD研修プログラムWG：新任教員合同研修（3/13,14）報告
4. 来年度活動方針、2011年度以降の連携体制について

【検討事項】

1. 第2回連携校全教員対象アンケート結果
2. eポートフォリオ調査委託
3. SNS運用支援について
4. その他

付録1

「授業評価アンケート」に関するWebアンケート調査の結果
（2010年12月実施）

はじめに

本調査の主な目的は、(1) 全学的な取り組みである授業評価アンケートに対して、連携校の各教員がどのような意識を持って活用しているかの現状を把握する、(2) 連携校の教員のあいだで調査結果を情報共有し、授業評価アンケートを授業改善に役立てる意識を高める、の2点です。

本調査は、放送大学ICT活用・遠隔教育センター（旧メディア教育開発センター）のWebアンケートシステム REAS（リアルタイム評価支援システム）を使って実施しています。また、質問項目（9)、(10）の定性項目のデータ分析は、テキストマイニングソフト「True Teller」（野村総研）を利用しています。

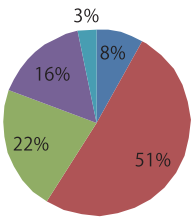
1. 基礎データ

回答者数	311名（回答率　約14%）
性別	男性72%、女性27%
年齢	30代22%、40代25%、50代30%、60代31%
職位	教授46%、准教授23%、専任講師13%、助教・助手7%、その他6%
授業経験年数	平均15.2年（標準偏差10.7年）

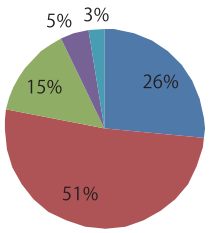
2. アンケートの回答：定量項目(1)～(8)

青：そう思う　**赤**：どちらかといえば思う
緑：どちらでもない、わからない　**紫**：そう思わない　**水色**：全く思わない

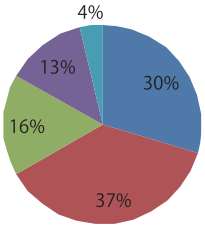
(1) 授業評価の適切さ



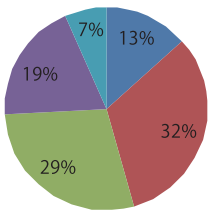
(2) 授業改善への参考度



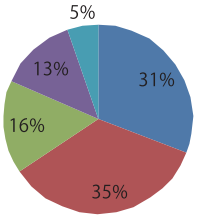
(3) フィードバックの必要性



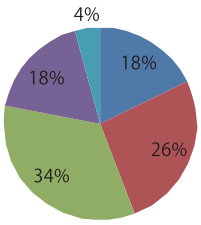
(4) 教員どうしの相互参照



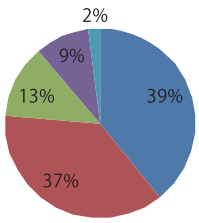
(5) 他教員の授業の参考度



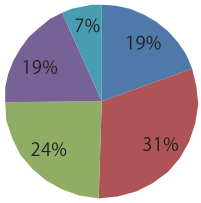
(6) 教員への支援の必要性



(7) 記述式項目の必要性



(8)Webアンケートの希望度



各項目に関して、以下の2点を簡潔に述べる。

結果：「そう思う」「どちらかといえば思う」を含めた肯定評価の割合（%）。教員の人数の%は、回答者の中での割合である。

検討点：質問項目に関して、本システムWGによる今後の検討が望まれる点（必要な項目のみ）

(1) アンケート結果は、受講生が授業を適切に評価したものであると思いますか？

結果：約59%の教員は、受講者には授業を適切に評価する能力があり、評価結果を尊重する必要があると考えている。

(2) アンケート結果を参考にして、授業改善につなげていますか？

結果：約77%の教員は、授業評価アンケートの主な趣旨といえる授業改善を理解して実践している。

検討点：授業評価アンケートの結果を授業改善につなげる手法の確立

(3) アンケート結果に関して、担当教員から受講生に対して何らかのフィードバックが必要と思いますか？

結果：受講生への評価結果のフィードバックに関して、約67%の教員は抵抗がなく、受講生の利益につなげることが必要と考えている。

(4) アンケート結果を他の教員に見せて、授業改善について相談しあうことが必要と思いますか？

結果：アンケート結果に基づいて教員がチームで授業改善に取り組むことに、約45%の教員が必要性を認識している。

(5) アンケート結果の良い教員の授業の内容や方法を、参考にしたいと思いますか？

結果：約66%の教員は、受講生の評価の高い教員から授業アイデアを吸収したいと考えている。

検討点：授業アイデアを教員どうしで情報共有しあう体制づくり

(6) アンケート結果の良くない教員に対してサポートが必要と思いますか？

結果：約44%の教員は、授業改善に対する他者や組織のサポートの必要性を認識している。

検討点：組織的サポートが有効であることを示すための、成功例の提示、方法論の確立など。

(7) 記述式のアンケート項目は必要と思いますか？

結果：授業評価の把握や授業改善のヒントを得る上で、約76%の教員は記述式の項目を重視している。

(8) 各教員が手軽に質問項目を設定できるWebアンケートがあれば、活用したいと思いますか？

結果：約50%の教員は、各教員による任意でのWebアンケートを活用したいと考えている。

検討点：使いやすさ、操作面などで利用可能性の高いWebアンケートシステム

3. 自由記述：定性項目(9), (10)

ここでは、自由記述を求めた項目（9）および項目（10）への回答を、テキストマイニングソフト「True Teller」（野村総研）を使って分析した結果を報告します。テキストマイニングによる分析として、ここでは単語の出現傾向を主に報告していますが、その解釈においては特徴が見られた単語が実際の記述の中でどのように使われているかをあわせて検討しています。

分析対象項目

（2）について、アンケート結果をどのように授業改善につなげていますか?

（6）について、アンケート結果が良くない場合、どのようなサポートがあるとよいと思いますか?

311名のアンケート回答のうち、項目（9）に227件、項目（10）に202件の記述がありました。

頻出単語と話題

2つの項目に対する回答で、頻出した単語の一覧を表1に示しました。対象となった単語は、名詞・形容詞・動詞のみです。

授業改善に関する項目（9）では、「要望」「意見」「指摘」といった単語が多く現れています。これは、学生からの指摘に対する授業改善を行っているという回答が多いことを反映しているといえるでしょう。また、「改善」「悪い」等が多くみられ、学生から指摘された悪い点を改善しようとしていること、「具体的だ」「記述式」等からは記述式項目に現れた学生の具体的な指摘を重要視している教員が多いことが読み取れます。記述式のアンケート回答が重視されていることは、項目（7）の結果にも表れています。さらに、「板書」「スピード」「私語」「教材」、また表には含まれていませんが「声」（9件）等は、具体的に多くの方が改善に努めている内容といえるでしょう。

次に、アンケート結果が良くない場合のサポートに関する項目（10）では、質問である「どのようなサポートがあるとよいか」に対する答えとして「アドバイス」「見る」（他の教員の授業を見る、当該教員の授業を他の教員が見る）、「相談」「FD」などが多く挙げられています。また、アンケート結果の良し悪しに関連した記述や、サポートの必要性に関する単語も多く出現していることがわかります。

項目（9）と、項目（2）「アンケート結果を参考にして、授業改善につなげていますか?」への意見との関係

項目（2）での選択の違いと、項目（9）への回答の関係を分析しました。項目（2）への回答の違いをグループとし、単語の出現頻度数とグループの違いの関係を、コレスポンデンス分析によって分析しました。ただし、「そう思う」「どちらかといえばそう思う」という回答者は多い一方、否定的な選択肢を選んだ回答者が非常に少ないため「そう思わない」「全く思わない」の2つの回答は1グループにまとめて、全体で4グループの比較をしています。

コレスポンデンス分析の結果得られた2次元のマッピングを、図1に示しました。「そう思う」と「どちらかといえばそう思う」の2群が左下の近い位置に配置され、これら2グループは項目（9）

で似た記述傾向を示していることがわかります。一方、「どちらでもない、わからない」と「そう思わない・全く思わない」の2群は右方向に順に配置され、プロットの横軸（コレスポンデンス分析の第1軸）にそって項目（2）への回答態度が並んでいます。

項目（2）で、改善につなげていると回答した2グループのある左側領域には、具体的な改善内容や機会（教材, 私語, スピード, 板書, 次年度, 等）や、改善に努める態度等に関すると思われる単語が配置されています。項目（2）のこれら2グループでは、項目（9）に対してもこのような改善内容が具体的に記述されていることがわかります。

項目（10）と、項目（6）「アンケート結果の良くない教員に対してサポートが必要と思いますか?」への意見との関係

同様に、項目（6）への回答グループと、項目（10）への回答傾向の関係を、コレスポンデンス分析によって分析しました。ただしここでも、項目（6）に「そう思わない」と「全く思わない」と答えた人数が少ないため、これらを1グループに統合しました。

コレスポンデンス分析の結果得られた2次元のマッピングを、図2に示しています。プロットの左右方向（コレスポンデンス分析の第1軸）に、項目（6）での賛否が順に並んでおり、左側が「必要無し」、右側が「必要あり」という軸が現れています。

出現する単語についてみると、右側にはサポートの内容に関わると思われる単語（アドバイス, 相談, 受ける, 見る, 等）が多く、サポートの必要性に肯定的な回答者は、質問である「どのようなサポートがあるとよいと思いますか?」に対し、具体的なサポート内容としてこれらを回答しているようです。

一方、プロットの左側には「意識」「自分」「サポート」「必要だ」「改善」といった単語が配置されています。項目（6）で否定的回答傾向をしたグループの、項目（10）の記述内容におけるこれらの単語の使われ方をあわせて検討したところ、これらの記述は外部からのサポートの有効性に対する疑問の表明とつながっている傾向がみられました。

4. 全体を通じて

全体的に肯定評価の傾向が強く、(4)、(6) 以外の質問項目はすべて、「そう思う」「どちらかといえば思う」を含めた割合が50% 以上でした。全学的な取り組みである授業評価アンケートに取り組む姿勢や、その結果を授業改善につなげる意欲は、おおむね高いと解釈できます。

一方、(4)、(6) の質問項目で、「そう思う」「どちらかといえば思う」を含めた割合が50% 以下でした。授業評価アンケートの結果を、教員どうし、あるいは組織的な協調体制のもとで活用することに対しては、教員は積極的でないと解釈できます。

本調査結果は、回答された約14% の教員のデータに基づいています。連携校の全教員の傾向を調査結果に反映させるために、今後も回答率を高める必要があると考えます。

以上

2010年2月　京都FD開発推進センター／FDシステム検討WG

表1　頻出単語（頻度10以上の単語）

項目（9）授業改善（227）

	単語	品詞	件数
1	授業	名詞	102
2	学生	名詞	98
3	改善	名詞	62
4	アンケート結果	名詞	54
5	改善する	動詞	47
6	内容	名詞	43
7	要望	名詞	33
8	アンケート	名詞	32
9	板書	名詞	28
10	意見	名詞	25
11	項目	名詞	25
12	参考	名詞	23
13	具体的だ	形容詞	21
14	悪い	形容詞	19
15	自分	名詞	19
16	努める	動詞	19
17	指摘	名詞	16
18	教員	名詞	15
19	ない	形容詞	14
20	自己	名詞	14
21	良い	形容詞	14
22	対応する	動詞	13
23	スピード	名詞	12
24	記述式	名詞	12
25	教材	名詞	12
26	次年度	名詞	12
27	難しい	形容詞	12
28	応える	動詞	11
29	私語	名詞	11
30	心がける	動詞	11
31	努力	名詞	11
32	工夫	名詞	10
33	仕方	名詞	10
34	書く	動詞	10
35	説明	名詞	10

項目（10）サポート（202）

	単語	品詞	件数
1	教員	名詞	82
2	授業	名詞	81
3	アンケート結果	名詞	56
4	学生	名詞	54
5	サポート	名詞	46
6	良い	形容詞	42
7	悪い	形容詞	37
8	必要	名詞	34
9	改善	名詞	32
10	必要だ	形容詞	29
11	アンケート	名詞	26
12	内容	名詞	26
13	自己	名詞	20
14	ない	形容詞	17
15	機会	名詞	17
16	大学	名詞	17
17	具体的だ	形容詞	16
18	改善する	動詞	15
19	アドバイス	名詞	14
20	結果	名詞	14
21	見る	動詞	14
22	どのようだ	形容詞	12
23	参考	名詞	12
24	受ける	動詞	12
25	努力	名詞	12
26	問題	名詞	12
27	教育	名詞	11
28	自分	名詞	11
29	相談	名詞	11
30	FD	名詞	10
31	意識	名詞	10

赤字は，2項目を比較した時に一方の項目だけに特に頻出したキーワード。

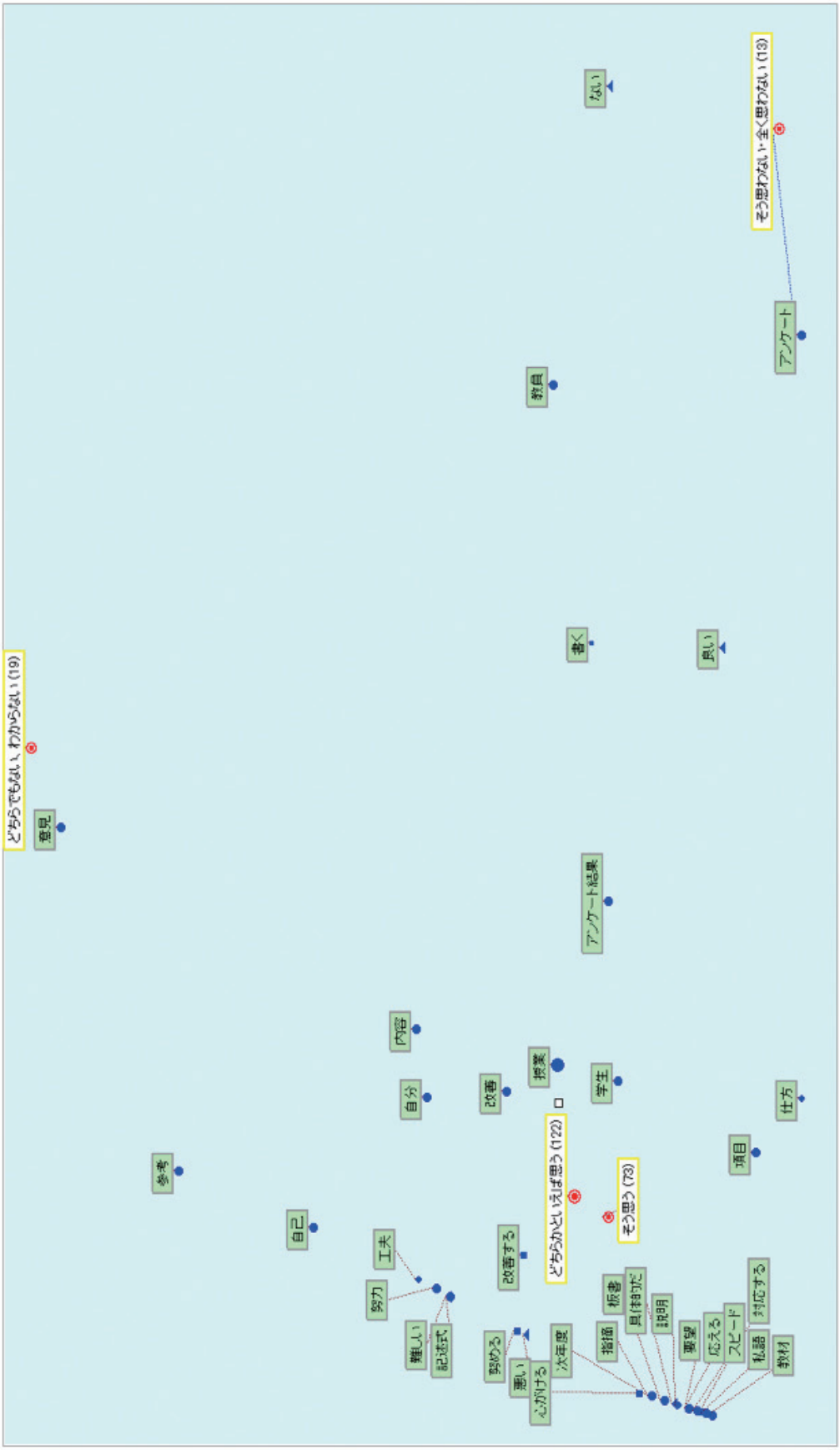


図1　項目(9)の単語マッピング（項目(2)への回答グループの比較，頻度10以上の上位35語を使用）

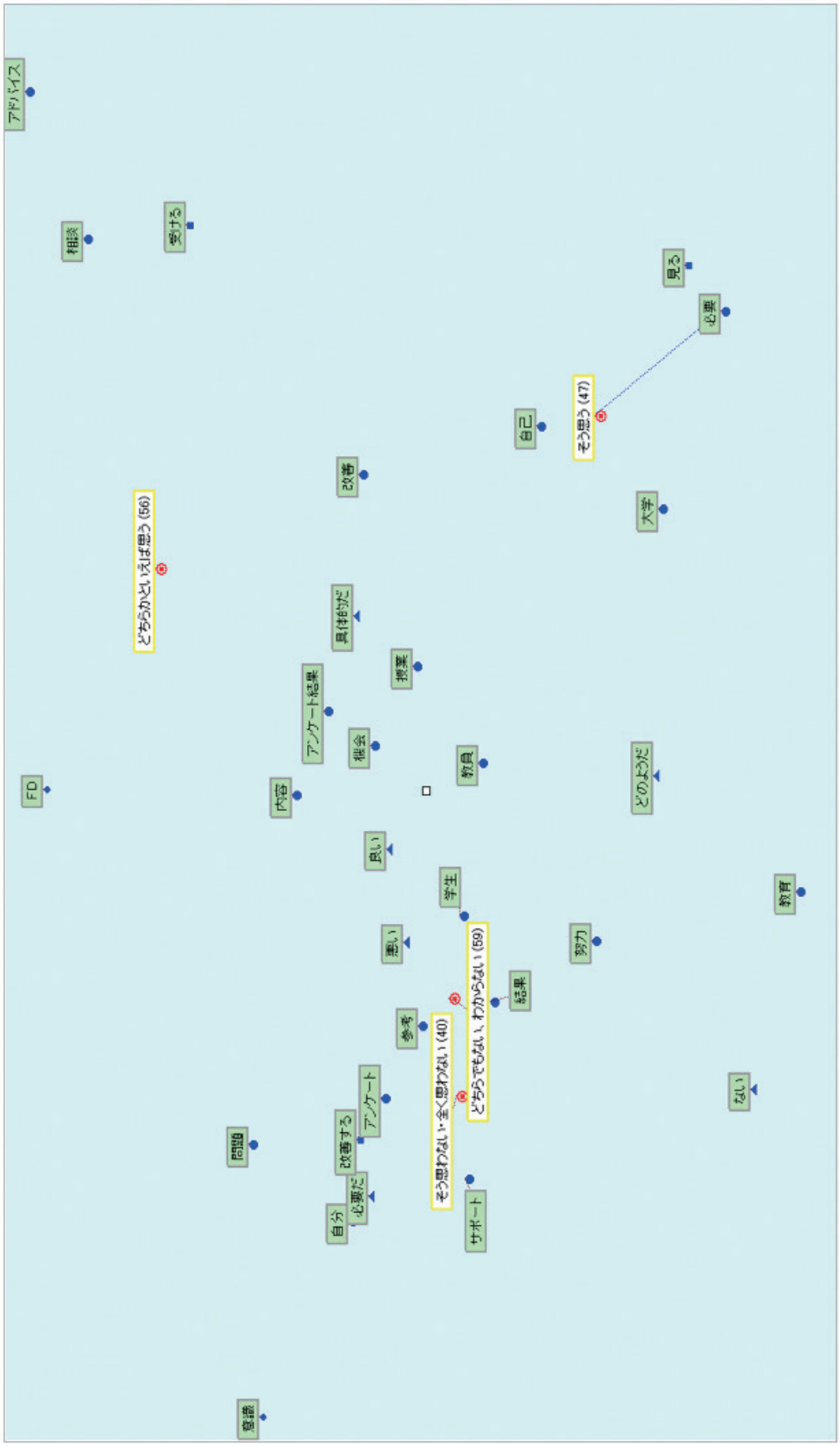


図2　項目(10)の単語マッピング（項目(6)への回答グループの比較，頻度10以上の上位31語を使用）

付録2

クリッカー授業実践報告

▶PF-NOTE活用の報告書

酒井浩二　（京都光華女子大学　人間関係学部　准教授）

▶クリッカーを導入した授業実践

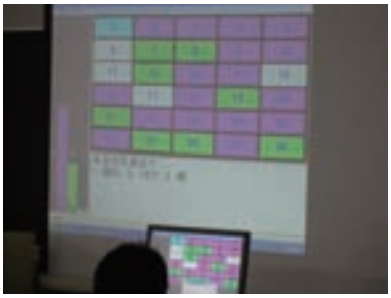
原　清治　（佛教大学　教育学部　教授）

▶EduClick試用報告書

西村美紀（大谷大学短期大学部　幼児教育保育科　講師）

▶クリッカーを用いた看護学技術の修得を目指した演習の試み

梶谷佳子（京都橘大学　看護学部　准教授）



PF-NOTE活用の報告書

報告者　酒井浩二（京都光華女子大学　人間関係学部）

FDシステム検討ワーキンググループの活動の一環として、フォトロン株式会社が開発したPower Feedback Note（以下PF-NOTE）を使って、参加型授業への取り組みを検討した。本報告では、講義とグループ発表でのPF-NOTEの活用事例を紹介し、参加型授業運営法を提案する。本報告は、PF-NOTEを含むICTを使った授業改善の取り組みとも位置づけられる。

以降、1章でPF-NOTE導入の経緯を述べ、2章でPF-NOTEを使った授業運営を説明し、3章で受講生によるクリッカーの反応の分析結果、4章で授業でのクリッカー利用に関する受講生の評価を述べる。さらに、5章で授業後のコンテンツ視聴の効果を考察し、6章でPF-NOTEを用いた参加型の授業運営法を考察し、7章で更なる活用例を紹介し、最後に8章でまとめを述べる。

1. システム導入の経緯

1.1　PF-NOTEとは？

受講生の反応をデータ収集するクリッカー（**図1**）の反応と、授業風景を撮影した動画を同期して保存するシステムである。**図2**は、PF-NOTEで収録した授業映像の1シーンである。授業動画、クリッカーによる学生の反応、パワーポイントのスライドの3つを同期させて蓄積できる。また、授業中の各受講生の反応を時系列的に参照でき、確認テストでの各選択肢の反応率なども参照できる。また、eラーニングの授業コンテンツとして公開し、受講生の復習や未受講学生の視聴などにも活用できる。

図1：学生用のクリッカー機

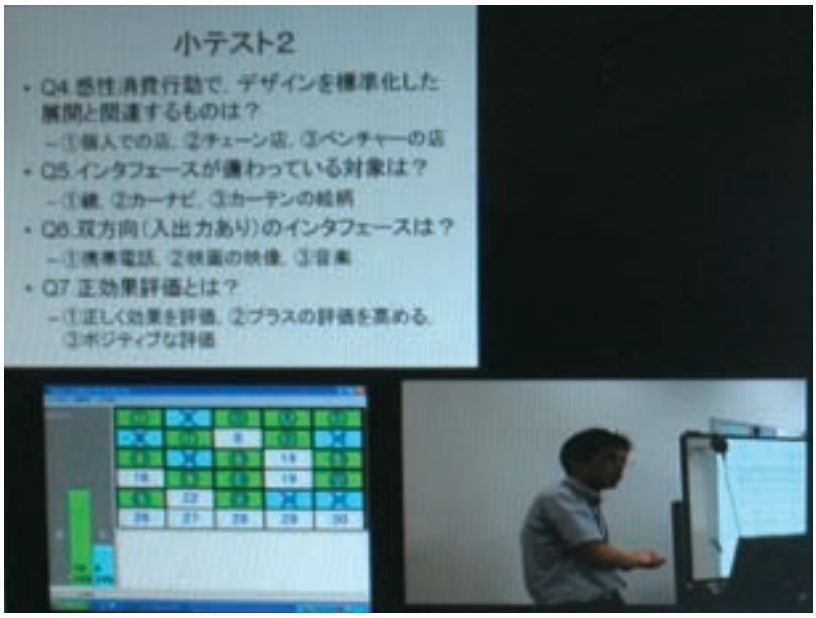


図2：Power Pointのスライド（左上）、クリッカーの反応（左下）、授業動画（右下）、の3つが同期して、PF-NOTEで保存された授業コンテンツの1シーン。

1.2　本学への導入機材の一式

以下が、導入機材の一式である。

・Power Rec MV（PF-NOTE indicator/Editor ソフト・インストール済み収録装置）
・電源コード
・音声ケーブル
・キーボード/マウス
・操作用モニター
・RGB ケーブル×2
・マルチビューケーブル
・LAN ケーブル×1
・EduClick レシーバー
・EduClick リモコン（100 台）収納ケース入り
・ビデオ機器（ケーブル含む）
・PF-Note Monitor 用 PC（閲覧用ソフト・インストール済み）

図3 は、PF-NOTE 利用時の ICT 機器一式を設定した写真である。本体の配線が結構複雑となる。

図3：PF-NOTE で使う ICT 機材一式

1.3　本学への導入の経緯

以下、導入の経緯である。

6月11日（木）システムの説明：京都FD開発推進センターでソフトウェアの操作方法と使用例の説明を、桑原毅氏（株式会社フォトロン eソリューション部 東日本チーム 担当課長）から、デモを交えて1時間半ほど聞いた。PF-NOTE は、教員の授業評価、学生のプレゼン評価、面接など多方面で活用でき、実際に授業コンテンツも参照できる東北大学の事例が参考になると紹介された。

6月25日（木）本学へのシステム導入とシステムの説明：京都光華女子大学（以下、本学）にシステムを導入頂き、根本淳一氏（株式会社フォトロン eソリューション部技術サービスチーム長）より、システムの簡易マニュアルに基づき、システムのハードウェアの接続、ソフトウェアの操作方法などシステム利用の説明を受けた。

（京都光華女子大学　酒井）

6月29日（月）授業のリハーサル：本学で、実際にシステムを設定して動作確認した。それほど試行錯誤しなかったが、システムの接続に30分間ほど必要だった。設定図を見れば一人で設定可能であるが、複数個所を接続する必要がありかなり複雑な配線である。接続に慣れた場合でも、設定準備に20分間程は必要である。片付けの所要時間は、箱に片付けるなど設定以上に時間を要し40分間程だった。借り入れ物品と本学の備品が混同しないよう注意した。

8月6日（木）システム返却：システム一式を京都FD開発推進センターに返却した。

1.4　システム活用の教室について

1.3節で述べたように、システムの搬送と設定で労力と時間を要するため、半期分の授業で活用する場合は、PF-NOTEを特定の教室に常時設定するのが現実的である。授業時に随時教室へシステムを持ち込み、授業後は別の部屋で管理する場合、以下の点に留意する必要がある。

・移動距離にもよるが、授業前のシステムの搬送に15分間程、設定に20分間程は必要である。また、授業後の後片付けに40分間程、搬送に15分間程が必要になる。
・システムの設定に20分間は要するため、前の授業が空いている教室を利用する。
・Power Rec MVの本体が重く、台車が必要である。
・雨天の場合、移動のため屋外に出る場合はシステムの搬送が困難である。
・授業で、スクリーンあるいはプラズマディスプレイが2つ、プロジェクタ2台が必要である。教室に設置されていないと持ち込みとなり、運搬や片付けの負担が大きくなる。

なお、平成22年2月現在ですでに販売されている、新しいタイプのPF-NOTEである「PF-NOTEコンパクト」「PF-NOTEポータブル」の場合、搬送や設定が大変簡易になる。

2.　授業運営

授業前に、受講生全員にクリッカー機を配布した。1回目授業の冒頭に、PF-NOTEのシステムの特徴と、クリッカーでの反応方法について簡潔に説明した。クリッカーの反応は匿名で、成績に反映させない点を受講生に告知した。授業後、クリッカー機を回収した。

以下、講義とグループ発表で、PF-NOTEを用いた授業運営の実践について述べる。

2.1. 講義

インタフェースやデザイン評価についてPower Pointで説明する授業で、平成21年7月の4回分授業で活用した。受講生は本学メディア情報専攻2年生が主体で、各週の受講生数は週により異なったが25名程であった。以下、各週の授業内容と授業運営法を示す。

1回目：Excelでのデザイン評価法の説明
2回目：画像を使った製品デザインの説明
3回目：画像を使った環境デザインの説明
4回目：画像を使ったバーチャルデザインの説明、前期授業の確認テスト
1回目：課題に関するExcelの計算方法の説明が中心で、細かい計算も説明したため、「1：理解

できた」「2：理解できない」の2択での理解確認を中心にクリッカーを活用した。「2」の回答が多い場合、担当教員が難しいと推測した内容を繰り返して説明した。

2～4回目：デザインについて画像を使った説明が中心であり、比較的理解しやすい内容であったため、理解確認はしなかった。代わりに、a.正誤のない質問、b.正誤のある確認テスト、c.小レポートの3つを授業で挿入して運営した。授業の流れは、たとえば、…スライド4枚目→a→スライド5、6枚目→a、c→スライド7、8、9枚目→b→…のように、10～20分間程度に1回、a、b、cのいずれかを挿入した。天野（2009）は、授業にメリハリをつける意味でも、クリッカーによる質問は時間的に分散させたほうが効果的と指摘している。以下、a、b、cの一例である。

a.入力しやすいのはデスクトップ型かノート型のどちらのパソコンか?

―選択肢：1.デスクトップ型、2.ノート型

b.ユニバーサルデザインは誰のためか?

―選択肢：1.リッチな人のため、2.すべての人のため、3.若い世代のため

c.福祉工学分野でのICT活用の方法は?

a、bで、クリッカーでの反応後、必要に応じて担当教員にあてられた学生は選択肢を選んだ理由を口頭で答えた。つまり、クリッカーと口頭での質疑応答を併用して、「教員の問題提起⇔学生の情報発信」に関して、二往復の双方向性のやり取りを行った。またcで、必要に応じて担当教員にあてられた学生は記述した内容を口頭で紹介した。

4回目：授業の最後30分間程、筆記試験に出題される可能性が高いことを伝えて、前期授業の確認テストを3択で17問実施した。問題の出題時、必要に応じて回答に向けた考え方や選択肢の用語説明なども行った。

図4は、授業の一シーンである。パワーポイントのスライドと、クリッカーの反応の画面の2つを投影して授業を進めた。

図4：講義系の授業のシーン

2.2. グループ発表

1年生の基礎ゼミの科目で、平成21年7月に前期最後の授業で活用した。受講生は本学メディア情報専攻1年生のみであった。1グループ3～4人が10～15分間で、計5グループが事前に用意

（京都光華女子大学　酒井）

した資料を配布して発表した。発表内容は、テーマが「環境」、タイトルが「リサイクルしよう!」であり、各グループがリサイクルの実践案を発表した。クリッカーの反応を映すスクリーンは、聴いている受講生には見られるが発表者には見られない位置に配置した。受講生数は18名であった。反応ボタンは、受講者の認知的な負荷を少なくするために、「1：興味深いと思った」「2：分かりにくいと思った」の2種類に限定した。

3. クリッカーの反応分析

授業後、受講生のクリッカーの反応は、授業動画と同期してPF-NOTEでコンテンツ化された。本章では、クリッカーの反応データの分析結果を紹介する。

3.1. 講義

4回目授業での、17問の3択問題に関する分析結果を示す。17問全体を通じて、3つの選択肢のいずれかを押した反応率は88.8%であった。残りの11.2%は、無回答や反応ボタンの押し間違えであった。また、3つの選択肢にまたがる回答があった問題数は、17問中3問であった。正答率より誤答率のほうが高かった問題数は、17問中2問であった。

17問全体の平均正答率は83.4%であった。ただし、選択対象外の反応は分析対象から除外した値である。また、問題の出題からクリッカーの反応を締め切るまでの約1分間は、何度でも反応ボタンを変更できた。そのため、他の受講生の反応を見て反応ボタンを変更する受講生も何人かおり、受講生一人の判断に基づく正答率ではない。正答者のみに関して、出題後からボタン押しまでの平均反応時間は10.7秒、標準偏差は8.6秒であった。

3.2. グループ発表

以下、18名の受講生に関して、5つのグループ発表全体に関する分析結果である。クリッカーを押した一人あたりの平均反応回数は8.6回（標準偏差9.7回）であった。また18名のうち、反応回数の最高が30回、最低が1回であり、反応ボタンを一度も押さなかった学生は4名であった。5グループ全体での総反応回数は156回で、内訳は「1：興味深いと思った」が150回（96.2%）、「2：分かりにくいと思った」が6回（3.8%）であった。

4. 授業評価

クリッカーを使った授業に関する、定量的、定性的な評価を報告する。定量的項目については、5件法では「5：非常にそう思う」「4：そう思う」「3：どちらでもない」「2：そう思わない」「1：まったくそう思わない」、2件法では「1：ある場合」「2：ない場合」で受講生は評定した。定性的な評価は自由記述であり、類似した内容は1つに集約し、誤字脱字は加筆修正して記した。アンケート項目を添付資料に示す。

4.1. 講義

4回目の授業後にアンケートを実施した。回答者は23名であった。質問1～5が5件法、質問6、7が2件法であった。以下、質問項目と回答結果の平均値および割合を示す。

1. クリッカーの利用に慣れましたか？　4.4
2. クリッカーでのクイズは面白いと思いますか？　4.2
3. クリッカーを使うことで、授業に積極的に参加することができましたか？　4.1
4. クリッカーを使うことで、授業に集中できましたか？　3.7
5. 受講生のクリッカーの反応は参考になりましたか？　4.1
6. クリッカーについて、どちらのほうが授業に積極的に参加できますか？「1」が95.7%
7. クリッカーについて、どちらのほうが授業に集中できますか？　「1」が95.7%

回答者23名中21名の自由記述として、以下のような内容があった。

・みんなの意見が分かって面白いと思う。
・先生が受講生をあてて答えさせるより答えやすく、授業は良い方向に進んだと思う。
・他人の意見を参考にしながら考えられるので、理解しやすかった。
・ゲーム感覚でできたのでよかった。
・授業に参加するのが楽しかった。
・過去の授業内容を振り返ったのも思い出せて分かりやすかった。
・使った方が覚えやすいと思った。
・授業を受ける積極性も高くなると思う。
・後期もクリッカーやりたい。
・使わないよりは使うほうがよいと思う。だけどクリッカーがあると私語が増えるような気がする。
・あえて授業に影響を与えているように感じなかった。参加型で授業に集中させる考え方は分かるが、番号でなく言葉やそのことに対しての意欲が大切だと思った。

上記の結果より、クリッカーの活用で、授業に対する面白さ、積極的な参加度、受講生の反応の参考度、集中度は全体的に高まったと解釈できる。自由記述もほとんど肯定的であったが、私語が増える点や言葉での説明の重要性などを指摘した内容もあった。土持（2009）は、機器に依存することで逆に発言を停滞させ消極的になるのではという、クリッカーを利用した学生の意見を紹介している。クリッカーの活用による教育効果は、教員の力量と工夫次第といえよう。

山田（2008）は、クリッカーを活用した講義型の授業後、5件法で授業評価した。その結果、5件法のうち肯定的評価の上位2項目の割合は、関心度73%、楽しさ78%、気分転換96%、受講生との相談による理解度60%と高かった。講義型授業でクリッカーは授業改善に役立つと解釈でき、本研究の結果は山田（2008）と同様とみなせる。

4.2. グループ発表

5つのグループすべての発表後に、アンケートを実施した。回答者は16名であった。質問1、2が5件法、質問3が2件法であった。以下、質問項目と回答結果の平均値および割合を示す。

1. クリッカーを使うことで積極的に発表を聞くことができましたか？　3.8

（京都光華女子大学　酒井）

2. 受講生みんなのクリッカーの反応は参考になりましたか？　　3.7
3. 受講生によるクリッカーでの反応がある場合とない場合のうち、どちらのほうが積極的に発表できますか？　「1」が100%

回答者16名中8名の自由記述として、以下のような内容があった。

・けっこうみんな押すタイミングが一緒。今まで以上に集中して話が聞けた。次もクリッカーを使ってやりたいと思った。
・緊張してしまうけれど楽しかった。
・面白かったり興味のあるところを探したりしながら聞くから、最後までしっかり聞くことができるのでよい。
・他人の反応は気になるので、クリッカーを導入することにより、しっかりと発表に取り組むことができる。しかし、一生懸命に発表を聞くあまり、クリッカーの反応を確認し忘れていたようにも思える。
・クリッカーを使うのに抵抗があった。

聴く立場では、積極的に聴けて、他の受講生の反応も参考になったとみなせる。発表者の立場では、クリッカーでの評価を意識して発表者全員が積極的な発表を心がけたといえる。自由記述はほとんど肯定的評価であった。

学生によるプレゼンでクリッカーを用いた末本ほか（2009）は、発表後に回答者32名に対し、「クリッカーの活用がプレゼンを学ぶ上で有用だったか」を質問した。その結果、肯定的評価が9割強と非常に高く、その理由は、自分の結果が反映される、他の学生の意見が見える、授業に参加している気になるなどの自由記述があった。本研究の結果は、末本ほか（2009）の結果と概ね同様とみなせる。

5. 授業後のコンテンツ視聴の効果

クリッカーのみを授業で導入する場合、受講生の反応を授業動画と同期させて参照できない。しかしPF-NOTEの場合、この同期が可能となり、授業動画を振り返りながら反応データに関して内省できる。以下、講義と発表での授業内容の内省を簡潔に述べる。

5.1. 講義

担当教員は、授業動画とクリッカーの反応を振り返った。2.1節で紹介した、a. 正誤のない質問、b. 正誤のある確認テストに関して、受講生の回答傾向を見ながら授業動画を振り返ることができるため、今後の改善点を明確に見出しやすかった。aに関して授業内容に関する学生の考え方や関心内容などを、bに関しては授業の理解度を把握できた。bに関して、正答率の高かった問題では、問題の難易度が高かった場合は適切に説明できた時間帯などを振り返った。正答率の低かった問題では、どの時間帯でいかに説明すべきであったかなどを振り返った。

5.2. グループ発表

発表日から約2か月後の、平成21年10月の後期の最初の授業で、各グループは発表コンテンツをノートパソコンで視聴した。その後、アンケートを実施した。回答者数は18名であった。以下、質問1、2は5件法、質問3は自由記述であった。

1. 動画のみの場合、発表の内容や方法の改善に役立つと思いますか？　3.9
2. 動画とクリッカーの反応が統合されている場合、発表の内容や方法の改善に役立つと思いますか？　3.9
3. 映像で発表を振り返って、できるだけたくさん気づいた点を書いてください。

上記の質問3の自由記述として、以下のような内容があった。最初の2つがPF-NOTE、残りが発表態度に関する記述である。

・発表者の動きが分かり、その人が伝えたいことが分かりやすい。客観的に自分を見られ、聴く側の気持ちになって、どんな態度が良いか表情や動きの研究ができる。
・発表とクリッカーの反応を見ることで、今後の発表の改善になると思う。また、声の大きさや態度なども改善できると思う。
・落ち着きがない。
・原稿を読みすぎていて顔が見えなかった。
・大きく聞き取りやすい声でしゃべるのが必要だと思った。
・緊張のせいで表情が硬かった。
・髪の毛を治すしぐさが多いように思った。
・下を向いていた。前を見て、聴き手に訴えかけるように話したほうがよかった。

質問1、2は共に評定値3.9で比較的高い値であった。ほとんどの学生は、クリッカーの反応を参考にせずに、動画を見て自分の判断基準で発表態度を内省しているとみなせる。視聴者の評価は、4.2節の質問3の結果のように発表前では発表への動機づけを高めるが、発表後では、それのみでは効果的でないとみなせる。発表後は、中島（2008）のように、発表者への言語的なコンサルティングを通じて活用するのが適切とみなせる。また質問3で、発表態度に関する内省はすべて反省点であった。動画での参照を通じて、発表態度の改善への動機づけが高まったと思われる。

6. 有効な授業運営法

本章では、2章から5章までの授業での実践を踏まえて、PF-NOTEを活用した参加型授業の運営方法を、授業前と授業中に分けて提案する。ただし、授業前についてはグループ発表を省略して講義のみ論述する。

6.1. 授業前（講義）

本研究では、a.理解度確認、b.正誤なしの質問、c.正誤ありの確認テストでクリッカーを活用した。青野・鎌田（2009）は、設問作りは、授業デザインの振り返りや、授業で何を伝えたかったかの明確化に役立つと指摘している。上記のa～cを入念に検討して設定することで、問題に回答できるよう

授業内容が考案されているか確認し、必要点があれば授業内容に加筆することにもつながる。

有効利用に向けた工夫点は以下の2点である。①授業内容と関連する重要な質問をする、②正答と関連度の高い誤答を選択肢として設定する。①の質問設定場面としては、上記のa～cに関して、aは少し難しい授業内容できちんと理解できているかどうかを確認する場合、bは授業内容について受講生の考え方を把握・共有する場合、cは重要な授業内容のテストをする場合となる。b、cは、授業内容の説明後だけでなく、授業内容の説明前に問題提示もありうる。これにより、受講生の考え方や事前知識の程度を確認し、また授業内容を聞く動機づけを高めさせることができる。②について、受講生が授業内容を深く考えることを目的とする場合、正答と関連度の高い紛らわしい誤答を設定する必要がある。bの場合、たとえば「憲法改正に1.賛成、2.反対のいずれか」など、知識だけでなく考え方や価値観などを選択肢に設定し、議論を深めることにも活用できる。

鈴木（2009）は、宿題で受講生がクイズを作成して回答を解説することを通じて、問題作成能力と説明能力を伸ばすことができると指摘する。設問の設定は授業の重要点を把握する必要があり、授業理解を深める上で意義ある取り組みである。この宿題を次週の授業最初で紹介すると、前回授業の復習になる。また、担当教員と学生が一緒に授業運営する気運も高まり、参加型授業の構築につながる。

本学ですでに実施されていたため活用しなかったが、授業評価でPF-NOTEを使うとデータ入力の手間も省けて大いに効果的である。たとえば、ケータイを使った授業評価（鳥巣・佐々木 2008）では、評価結果を次週の授業改善につなげることができる。こうしたICT機器の導入により、授業評価結果が迅速に担当教員にフィードバックされ、次週の授業改善に活用されるのが望ましい。

6.2. 授業中

6.2.1. 講義

受講生の反応をフィードバックした後、担当教員がすべき重要な点は、①反応の結果を説明して理解促進につなげる、②必要に応じて特定の反応をした理由を受講生に質問する、の2点である。①について、特に正答率が低い場合、その選択肢が正答である理由を詳しく説明する必要がある。鈴木（2009）は、正答率が低い場合の担当教員の姿勢として、学生が悪いのでなく自分の説明の仕方が悪かったと思う努力が必要と指摘する。また、正答だけでなく誤答も説明することで、関連情報の知識が深まる。②について、4.1節での授業の感想で「番号でなく言葉やそのことに対しての意欲が大切」とあるように、正答あるいは誤答を導いた理由を受講生が明示的に考える機会が重要である。受講生が自分の回答の根拠を考え、授業中に発表したり聞いたりして、問題の理解をより深められる。

4回目授業の17問の確認テストについて、筆記試験問題と関連する旨を告知したところ、問題や解答を熱心にノートに書き込む受講生が何人かいた。しかし、正答率は成績に反映させなかったこともあり、クリッカーの反応率は88.8%と100%に達しなかった。鈴木ほか（2008）によれば、医学部生向けの授業で、クイズの結果を成績に結びつけなかったためか、1回目授業で100%だった回答率が、数回目の授業では60%程度まで下がった。一方、鈴木ほか（2008）によれば、クリッカーでの正答率を成績に反映させた結果、反応への学生の意欲が高まった。確認テストの正答率を成績に反映させることは一方法である。鈴木（2009）によれば、カリフォルニア大学のバークレー

校でのある科目では、正答率を成績の5%程度で反映させており、学生は必死になって考えて回答し、出席率も向上してクイズの参加率はほぼ100%になったようである。

本研究では、正誤ありの確認テストで、担当教員が問題を提示してほぼ全受講生が回答し終えたところで正答を提示した。そのため、他の受講生の反応を見て反応ボタンを変更する学生もいた。川島（2009）による旗揚げ式の確認テストでは、受講生全員が同時に選択した番号をあげている。クリッカーでも、考える時間のあいだは反応ボタンを押さないように告知し、担当教員の合図と一緒に反応ボタンを押してもらい、たとえば合図から5秒後に正誤のフィードバックを提示し、反応ボタンを変更できないように運営するのが良い。

6.2.2. グループ発表

本研究では、反応ボタンの選択肢数は、講義では2～3個であったが、グループ発表では2個に設定した。中島ほか（2008）は､5種類以上のキーワードを使うとシステムに不慣れな利用者にとって学習の妨げになると指摘し、大学院生による模擬授業で、使用者の認知負荷を極力少なくするため、「興味深い」「改善可能」「理解困難」の3種類で実践した。本授業の目標は、より効果的なプレゼンに向けた発表ではなく、1年生対象の科目のため、分かりやすく聴き手にプレゼンすることであった。そのため、肯定的評価と分かりにくい場面の2種類のみに設定した。発表中に細分化した評価は難しく、2年生以下の学生であれば反応ボタンは2種類で十分と考えられる。

「興味深い」の反応率が96.2%と非常に高く、「分かりにくい」の反応率は3.8%と非常に低かった。発表の中には、担当教員から見て少し理解しにくい説明もあり、反応率3.8%は過小評価と見受けられた。反応は匿名であったが、受講生は否定的な評価を抑制したと思われる。発表者が授業後にコンテンツ視聴する際、「興味深い」の反応は今度のプレゼンへの動機づけを高める上で重要であると同時に、「分かりにくい」の反応も、改善点を修正して分かりやすくプレゼンするためには重要となる。受講者の率直な反応を促すために、「分かりにくい」の反応は発表の分かりやすさを高める上で大事になる点を、発表前に視聴者に説明する必要がある。また、中島（2008）のように担当教員も反応ボタンを押して、発表後に発表者に助言するのが適切である。

本研究では授業時間の関係で実践できなかったが、以下の2つは実践すると効果的である。①発表後、担当教員が口頭で質問と選択肢を問題提起し、視聴者が反応する。②6.1節で紹介した鈴木ほか（2008）と同様、発表グループが質問と選択肢を事前に作成し、発表後に出題する。これらの取り組みにより、発表内容の理解度を確認でき、議論が促進される。発表者、受講者ともに発表への参加意識が高まり、参加型授業の構築につながる。

7. 発展的な活用例

平成21年7月23日（木）に、フォトロン株式会社の桑原穀氏から、新たに開発中のシステム「PF-NOTEポータブル」について説明を受けた。その際、多様なPF-NOTEの活用場面例をお聞きしたので、そのメモを以下に記す。

・グループディスカッション：メンバーの発言に対して、たとえば「1：論理的だ」「2：独創的だ」

などで議論中にボタン押しさせる。後で見返して、自分の発言や他者の発言に対する他者評価を参考にする。

・教員の評価の一貫性や質を高める：看護分野の実習で車いすに座った人をベッドに寝かせる際の評価について、学生が患者さんを寝かせるまでの状況を見て、6人ほどの教員がクリッカーで評価する。その後、教員が学生に問題点を指摘するのが通常の使い方だが、教員間で評価の一致度を検討する。教員間で、評価の一貫性や質を高めるための検討に使える。また、評価が低い実習場面は、学生がきちんと理解できていないことを意味するため、教員がきちんと学生に指導していたかどうかの検討にも使える。

・既存の映像を利用：動画はライブだけでない。既存の授業の動画やテレビの映像などを使って、関心のある内容を評価させたり、小テストを実施したりできる。

・屋外での実習：開発中のPF-NOTEポータブルの場合、満充電しておけば1時間ほどは屋外で使える。カメラやクリッカー機の持ち運びは負担であるが、利用可能性が広がる。

8. 結論

動画とクリッカーを同期させたICT機器であるPF-NOTEを講義と発表の授業で活用し、参加型の授業運営を実践した。その結果、講義では、授業への関心度、参加度、集中度は高まり、受講生の反応は参考になった。発表では、クリッカーでの評価により発表への意識が高まった。また、授業後のコンテンツ視聴により、講義の担当教員は受講生の反応と動画を関連づけて授業を内省しやすく、発表した学生は動画を参照して発表の内容や方法を改善しやすかった。PF-NOTEによる参加型授業運営の重要点として、授業前は質問内容と選択肢項目の入念な吟味、授業中は反応結果に関する十分な説明と選択肢を選択した理由を必要に応じて受講生に説明させることである。

謝辞

システムの活用について貴重なご意見を頂きました、株式会社フォトロンの桑原穀氏と根本淳一氏、株式会社内田洋行の鈴木大悟氏に感謝致します。

引用文献

天野憲樹（2009）ICTによる教育改善の可能性と展望.清水亮・橋本勝・松本美奈編著　学生と変える大学教育.ナカニシヤ出版,京都,pp.198-209

青野透,鎌田康裕（2009）適時の知識確認方法としてクリッカー等を用いた授業--学習動機の明確化と発展に向けて.教育システム情報学会研究報告,23：18-23

川島恵美（2009）参加型の学びの場をつくる～旗揚げ式アンケートについて～.川島恵美,寺敬子,森田雅也編著　多人数講義における双方向的授業の工夫―旗揚げ式とクリッカー式方法の実践―.関西学院大学出版会,pp.1-12

中島平（2008）レスポンスアナライザによるリアルタイムフィードバックと授業映像の統合による授業改善の支援.日本教育工学会論文誌,32：169-179

中島平,桑原毅,島田誠（2008）Power Feedback Note--授業の録画とクリッカーを用いたリアルタイム反応の統合による教授学習支援システム.Journal of Japan e-Learning Association, 8：56-64

末本哲雄,鎌田康裕,瀬川忍,松本豊司（2009）クリッカーとSNSを用いた学習動機づけを高める実習授業の構築.教育システム情報学会研究報告,23：92-99

鈴木久男（2009）クイズで授業を楽しもう.清水亮,橋本勝,松本美奈編著　学生と変える大学教育.ナカニシヤ出版,京都,pp.166-184

鈴木久男,武貞正樹,引原俊哉,山田邦雅,細川敏幸,小野寺彰（2008）授業応答システム“クリッカー”による能動的学習授業：北大物理教育での1年間の実践報告.高等教育ジャーナル：高等教育と生涯学習,16：1-17

鳥巣泰生,佐々木英洋（2008）リアルタイム授業評価システムを活用した授業改善（5）.大手前大学論集,9：203-225

土持ゲーリー法一（2009）ラーニング・ポートフォリオ.東信堂,東京

山田邦雅（2008）自作クリッカーシステムによる授業.高等教育ジャーナル：高等教育と生涯学習,16：19-29

（京都光華女子大学　酒井）

添付資料

1. 講義系の授業でのアンケート項目

以下の質問に関して、いずれかに○をつけてください。

1. クリッカーの利用に慣れましたか？

非常にそう思う　　そう思う　　どちらでもない　そう思わない　まったくそう思わない

2. クリッカーでのクイズは面白いと思いますか？

非常にそう思う　　そう思う　　どちらでもない　そう思わない　まったくそう思わない

3. クリッカーを使うことで、授業に積極的に参加することができましたか？

非常にそう思う　　そう思う　　どちらでもない　そう思わない　まったくそう思わない

4. クリッカーを使うことで、授業に集中できましたか？

非常にそう思う　　そう思う　　どちらでもない　そう思わない　まったくそう思わない

5. 受講生のクリッカーの反応は参考になりましたか？

非常にそう思う　　そう思う　　どちらでもない　そう思わない　まったくそう思わない

6. クリッカーについて、どちらのほうが授業に積極的に参加できますか？

使う場合　　使わない場合

7. クリッカーについて、どちらのほうが授業に集中できますか？

使う場合　　使わない場合

8. クリッカーを使った授業について、自由に感想を書いてください。

2. 発表の授業でのアンケート項目

以下の質問に関して、いずれかに○をつけてください。

1. クリッカーを使うことで積極的に発表を聞くことができましたか？

非常にそう思う　　そう思う　　どちらでもない　そう思わない　まったくそう思わない

2. 受講生みんなのクリッカーの反応は参考になりましたか？

非常にそう思う　　そう思う　　どちらでもない　そう思わない　まったくそう思わない

3. 受講生によるクリッカーでの反応を意識しましたか？

非常にそう思う　　そう思う　　どちらでもない　そう思わない　まったくそう思わない

4. 受講生によるクリッカーでの反応がある場合とない場合のうち、どちらのほうが積極的に発表できますか？

ある場合　　ない場合

5. クリッカーを使った発表や授業について、自由に感想を書いてください。

（京都光華女子大学　酒井）

クリッカーを導入した授業実践

報告者　原　清治（佛教大学　教育学部）

クリッカーを導入した2009年度後期の授業実践を2事例報告します。ひとつは大教室でおこなった「教育社会学」（受講生145名）、もうひとつは小教室でおこなった「教育学講読」（受講生31名）の授業実践です。

「教育学講読」では、授業の最終回に受講生に授業でクリッカーを使用した感想を書いてもらい、受講生の視点からクリッカーを導入した授業実践のメリットとデメリットを整理し、今後の授業改善への足がかりとしました。また、「教育社会学」では、講義の内容を学生に質問させるツールとして利用しました。

2つの授業実践を行った結果、共通して言えることは、クリッカーの導入により学習者が授業に主体的に参加する、一緒に授業を作っていこうとする思いを喚起する効果があることがわかりました。しかし、毎回、使用方法を考えた授業計画を立てなければ、学生は飽きてしまい、逆に学生の集中を削いでしまうデメリットもみられました。以上のことからクリッカーを導入する際は、1人の教授者だけでなく、TAなどスタッフが数人構成で授業計画をたてる必要があると考えました。

それではひとつひとつの授業実践をみていきたいと思います。

1. 大教室でのクリッカー導入

本講義は教育学科の学生を対象とした授業です。これは2回生の必修科目であり、2回生はほぼ全員が履修しています。また、145名の学生にクリッカーのコントローラーが行き渡らず、2人に1台の使用を余儀なくされました。

授業では主にPF-NOTEとマイクロソフトパワーポイントのスライドショーを併用して、講義の内容を学生に質問させるツールとして利用しました。授業の感想については佛教大学独自の学習管理システム（LMS：Learning Management System）を利用し、授業の進行はマイクロソフトのパワーポイントによるスライドを併用し、講義を進めました。

実際の授業の様子ですが、たとえば若年未就労者が増加した背景は大きく三つに分けられますが、1労働市場説、2教育問題説、3家庭環境説、をひととおり説明したあとに、どれが最もな適切な要因かをクリッカーで選択して答えてもらい、ディスカッションの契機としました。

教育社会学では主に学校にまつわる病理現象を中心に取り扱っています。とりわけ、いじめの問

題は子どもたちの内面にかかわる非常にナイーブな問題です。教師を志す学生たちには子どもたちのいじめに対してまずは被害者を守り、いじめの発覚を契機に人間関係の修復につながるような対応を学んで欲しいと考えています。このなかで実はいじめられたことがある人、いじめていた人、いじめを見て見ぬふりをしてきたひとはいないかをクリッカーで集計し、実際に学生に話をしてもらいます。こうした意見を学生全体で共有し、ほかのメンバーの学校体験を知ることは学生個人の経験に縛られた独善主義に陥らないためにも大変重要だと考えられます。なぜなら、教師を志す学生は、それぞれ異なる学校体験をもっていますから、個人的なきっかけから教師を目指す道を選んでいるためです。この講義後に学生に感想を書いてもらうと「実はいじめられていました」などの自己開示のあとに、ほかにいじめられている人がいたり、自分だけではなかったから安心したという意見、つまり、今日の学生は周りの人間関係に細心の注意をはらい、周囲から浮くことを怖がる傾向がみられました。クリッカーのリモコンの選択肢は学生たちの本音の思いを反映しています。それだけ講義の内容がよりリアルに、より実践的に子どもたち世界に近づき、そうした営みによって教育について考えるよい契機となりえたのではないかと思っています。

また、教育社会学では講義をすべて収録し、講義のポイントを後で編集して佛教大学のLMSに欠席者対象の教材としてアップしていました。そして、LMSには授業用のスレッドを立ち上げ、講義終了後に感想や小レポートを投稿してもらいました。自分の投稿内容を要約し、クリッカーを用いて集計したものを次回の授業で報告するという形式です。それらをチェックした後で、次の授業を展開しましたので、学生の側としては、「自分の意見が反映されている」と感じることができます。これまでの講義に対して受身だった学生の姿勢も徐々に能動的になり、講義中に挙手をする学生も増えてきました。わたしの問いかけに対する学生全体のリアクションもよくなってきました。

結論として、クリッカーは学生の学習コミュニケーションを促進させるきっかけとしてはおおいに効果的なツールであると考えられます。

2. 小教室でのクリッカー導入

本講義は教育社会学と同様に教育学科2回生を対象としたものであり、担当教員が指定したテキストを読み要約する力や批判的にテキストを読む力をつける講義と位置づけられます。科目担当者が複数いること、それにしたがって受講生も30人前後であった点が教育社会学との違いです。

授業を進める上において近年気にかかることとして、学生の読む力が低下してきている、そもそも読書する習慣をもたない学生が年々増加している点があげられます。そこで私は2007年度からグループ学習を導入し、テキストを章で分けて各章2班ずつに分担し、レジュメの完成度、教室でのプレゼンテーションの結果で聴衆している学生にどちらがよかったかジャッジさせるグループ間競争の原理を導入しました。ジャッジに勝ったグループには成績を加点するというインセンティブ

（佛教大学　原）

を設けています。グループ学習を実施することによってそれぞれの異なる視点に気づくことができ、見方を広げることができること、また一人では苦痛に感じる読書も仲間と支えあいながら読み進めることで読書の面白さを感じられるので、積極的な読書につながるのではないかというねらいがありました。

今年度の講義ではこのグループ学習形式にクリッカーを導入することにしました。クリッカーの利用方法は以下の通りです。

①クリッカーの集計機能を用いてジャッジをクリッカーによって行う

②クリッカーの質問機能を用いて各班は発表後に学習のふりかえりとして5問3択の問題を設ける

クリッカーを用いることによって、集計結果を瞬時にスクリーンにグラフに表示することができます。したがって、今回は学生個人のクリッカー正答率ものちに成績を加点するというさらなるインセンティブもつけることにしました。

本講義では、わたしとTAとで打ち合わせを重ねながら、クリッカーの使用方法について改善を加えていきました。

まずは、ふりかえり問題の出題の提示のやり方です。先にクリッカーを押した学生から「遅く回答する学生は、前に掲示されている情報に流されてしまい、最初に押した学生より有利に問題を解いている」という意見がみられました。すなわち、回答番号が色分けされた状態で視覚的に見えてしまうと、自分には正解がわからない問題でも「回答数が多い番号を押せば、正解だろう」ともっとも回答者の多い番号を選ぶため、学習のフィードバックをきちんと行うことが難しくなっていました。そこで回答番号の色分けをせずに出題をすることで、学生のモチベーションはあがり、答え合わせの瞬間、歓声があがったり、正解した学生の周囲が盛り上がりをみせました。これはクリッカーのごく初歩的な操作になりますが、こうしたちょっとした工夫で学生のモチベーションを持続させることができるのではないでしょうか。

3. 学生への感想（教育学講読、受講生31名対象）

【クリッカーを使用した場合のメリット】

1. 答えにくい質問も匿名のため、容易に回答できること
2. クラス全体の傾向を知ることができる。
3. 瞬時に答えがわかる正解・不正解がすぐに分かること、
4. クイズ形式の授業が楽しく、意欲的に知識をつけることができる
5. 視覚的な資料として使える

6.気付きや意見も手を挙げなくてもクリッカーを通して授業者に伝えることができる
7.参加者の充実感を実感できる。
8.学習の理解度を確認できる（授業者も受講者も）
9.珍しいから意欲がわく
10.良い点をとりたかったので、自分の班以外の章も自主的に勉強するようになった。
11.寝てる人も起きる→クイズに答えるために授業に集中する

【メリットその他の意見】

・採点の時間が省ける
・問題を考えるとき、7割程度の正解者を出すためには…と考えるきっかけになり、問題を考えることの難しさを知ることができた。
・学校で使うようになれば、授業の教具の一つとしても活用できると思う。
・出席状況の確認がとれる

【クリッカーを使用した場合のデメリット】

1.他の人の回答番号が色によってわかり、答えの偏りから、自分の答えを修正できること。（これは最後の授業では改善されており、とてもよかったです。その授業に適した使用方法を十分に考えなければならない。）
2.教室に置くとなると準備も大変だし、大きくて邪魔になる
3.自分が間違って違う番号を押していないか、不安になった
4.たまにクイズの問題文が小さすぎてみえない時があった
5.押し間違いを訂正しにくいのではないか

【デメリットその他の意見】

・クリッカーだけを使っていると「書く力」が養われなくなるんじゃないかと思う
・使い方が分かるまで時間がかかる
・授業中、クリッカーに気をとられて集中できない
・高額である（コストがかかるからどの学校にも取り入れられるようなものではない）
・押し直しができてしまうと自分が間違えたと思った時にもう一度新しい答えを出すことができてしまうこと。
・選択問題だから記述できない。○か×か△をあげることができない
・アメリカとかはyes/no　がはっきりした文化だからいいかもしれませんが、日本はあいまいな部分が多いから、すぐにyes/no を判断できにくいと思います。
・仮説の話だが、もし「いじめられた経験がある」などの質問の場合は大きなスクリーンとかは使わない方がいいと思います。いくら誰かわからなくてもクラスの人が見つけたりするかもしれないから。
・その場で選択を迫られる。もう少しゆっくり考える時間が欲しい

（佛教大学　原）

4. 今後の課題と改善点

授業を終えて今回の取り組みを振り返ると、クリッカーによって確かに学生の集中力が高まること、とりわけなかなか授業中に手を上げることが難しい大教室での授業において学生の活発な意見交換を行えた点については十分な評価ができると考えます。しかし、授業の発表中にでも、疑問点などが受講者のなかに出てきた瞬間、クリッカーを押してもらい、話がひと段落ついた後、データの集計を見て、疑問に思った人の数が多かった所をもう少し詳しく説明するというシステムもよいのではないでしょうか。

EduClick（クリッカー）試用報告書

報告者　西村美紀（大谷大学短期大学部　幼児教育保育科）

はじめに

2009年8月行われた海外視察において、オーストラリア・シドニーにおけるクリッカー使用事例を学んできた。その中で、特に情報を正確に習得するような授業において有効なのではないか、と視察メンバーと話し合った。そこで、該当する種類の授業内容を含む講義科目「幼児教育・保育課程論」においてクリッカー・システムの一つである内田洋行のEduClickを試用してみることとした。本試行は、深野専門研究員をはじめ、京都FD開発推進センターの指導の下、行われた。

登録学生数	76名（再履修者なし）
授業科目名	幼児教育・保育課程論（卒業必修科目）
対象・開講期	短期大学部第1学年・後期
授業の概要	卒業必修であると同時に、幼稚園教諭2種免許状及び保育士資格に必要な科目であり、休学等の学生以外の全員が履修している。幼稚園や保育所（園）での保育課程作成にあたって必要な知識の習得と、保育課程（とくに指導案）を作成できる基礎的な技術を培う。試行の行われた11月は、保育課程の根拠となる幼稚園教育要領と保育所保育指針についての知識習得を目指している。
試行クラスの状況	当該授業「幼児教育・保育課程論」については、大谷大学短期大学部幼児教育保育科1年生のみが受講している。この1年生を2つのクラス（A組とB組）に分けての授業が多く、自分のクラス以外の学生とはあまり親しくなっていない様子であった。（当該科目では2クラス合同で行っている。）とはいえ、顔はお互い知っており、顔と名前が一致する学生もいるという関係である。また、引っ込み思案の学生も多く履修しているため、授業中の発問への反応は決まった学生になりつつある。講義科目について、まじめに受講する学生が多い学年である。

1. 試行の概要

第1回目　10月28日

まず、EduClickを試用する目的やルールについて説明した。配布については、授業のはじめに、クラス別に自分の出席番号末尾2桁の番号が付されたカードを取り、回収については、授業終了後、通常の出席カード（一人ずつのカルテとして感想を書いていくカード）の提出と同時にケースに返却することとした。

ツールに慣れるために、中に入っている英語のデモを利用してみたあと、少しだけ授業内容に関係のある問いを出してみた。通常の「クイズ」の機能にて前週の授業内容の復習に関する問いであった。

第2回目　11月4日

前週の返却時に何人かが番号順にケースにいれていなかった。あえて、そのままにして、配布時に困ることを経験してもらい、順番どおりにきちんと返却しなければ、迷惑になることをコメントした。（その後は番号順というのを守って返却している。）

前週の内容の復習に関する問いを試みた。早押しなどの機能を利用したが、一番の学生だけが表示されるので、ほかの学生にとって参加している感覚がやや薄いようであった。この機能は少人数の場合だと効果的なのだろうかと感じた。また、授業の単位が取れそうか、といった正解のない問いを織り交ぜてみた。

第3回　11月11日

前週の反省を踏まえ、通常「クイズ」の利用での試行とした。利用は前週の復習ではなく、授業の最後の20分程度の間に、当日の授業内容に関する復習を補足説明を加えながら行った。また、考える時間に工夫をしてみた。20秒ないし40秒で、内容によって変えた。

第4回　11月18日

大学コンソーシアム京都や本学FD部会員のオブザーバーの参加があった。

最初に、復習としての問いを行い、その後、授業の途中（後半）でも利用した。ディスカッションを間に挟んだ使い方を試行してみたかったため、若干込み入った正解のある問いと正解のない問いを用意した。前者については話し合いをはさんで、同じ問いを2度答えてもらった。

第5回　11月25日

様々な年・月齢の子どもの様子を書いたカードを発達順に並べ替えるゲームをし、その中で利用した。最初に個人作業の後、答えてもらい、その後、小グループでの話し合いをはさんで、答えが変わったかどうか、もう一度同じ問いを行った。

EduClickについての簡単なアンケートを行った。

2. クイズ質問内容

10月28日（授業の最初に実施・前週の復習）

1）保育所の所管は？
〈厚生省・厚生労働省・文部省・文部科学省〉

2）幼稚園の所管は？
〈厚生省・厚生労働省・文部省・文部科学省〉

3）保育所対象とする子どもたちは、○○に欠ける乳児、幼児等であるが○○とは？
〈教育・養護・保育・養育〉

4）幼稚園の2年保育というと、満何歳の子どもたちが入園できる？
〈2歳・3歳・4歳・5歳〉

5）保育者の免許について、以下の組み合わせで正しいものは？
〈保育所―幼稚園教諭免許状・保育所―保育士資格・幼稚園―保育士・幼稚園―幼稚園教諭免許状〉

6）保育所保育指針が告示化されたのは何年か？
〈1956年・1999年・2007年・2008年〉

11月4日（授業の最初に実施・前週の復習）

1）〈環境を通しておこなう保育〉という場合の環境とは「世界の環境問題」という時の環境ではない。〈○・×〉

2）養護と教育の一体化は、特に〈幼稚園教育要領〉に示される。〈○・×〉

3）外因的モチベーションによる乳幼児教育はとても効果的である。〈○・×〉

4）5領域とは？（早押し）

5）〈領域〉の概念と〈教科〉の概念の違いを理解できましたか？
〈はいとてもよく理解できました・まあまあ理解できました・あまり理解できませんでした・ぜんぜん理解できませんでした〉

6）幼児教育・保育課程論の成績はどうなるか予想してみよう。〈S・A・B・C・F〉

11月11日（授業の最後に実施・当日の復習）

1）今日のメインテーマは？
〈保育所保育指針の改定について・幼稚園教育要領の改訂について・教育基本法の改正について・幼稚園について〉

2）幼稚園教育要領改訂に向けて、文科大臣が諮問したのは？
〈中央教育審議会・地方教育委員会・中央教育委員会・政府教育審議会〉

3）平成8年の中教審答申で出された概念は、何の力か？
〈考える力・生きようとする力・生きる力・考えようとする力〉

（大谷大学短期大学部　西村）

4）今回、生きる力に加わったのはOECDのなんという概念の考え方か？
〈キーワード・キーコンピテンシー・キーコンシクエンシー・キーコンセプト〉

5）キーコンピテンシー（OECD）の3つの力とは、環境と積極的にかかわりながら道具を使用する力、自律的に活動する力と、もうひとつは？
〈知識やテクノロジーを使う力・異質な集団で交流し、共同する力・夢を持ち、実行する力・自分の考えをうまく表現する力〉

6）幼稚園教育要領改訂においての基本方針を4つ挙げるなら、連続性、計画的環境構成、時間外の活動のほか何か？
〈知識基盤社会・生きる力・子育て支援・中央教育審議会〉

11月18日（授業の最初と途中に実施・前週までの復習および当日や前日の関連授業の復習）

授業最初

1）幼稚園教育要領の今回の改訂において、連続性が重視されている。2つの連続性を挙げるなら、子どもの生活の連続性と、もうひとつは何か？
〈家庭と地域・発達（育ち）・家庭と幼稚園・教師と子ども〉

2）中教審とは何の略か？
〈中央教育審議会・中間教育審議会・中心教育審議会・中央教科目審議会〉

3）教育の内容・・・5領域にないものは？
〈健康・表現・自然・人間関係〉

授業途中

1）保育所の目的は、何に欠ける子どもの保育を行うこと、そしてその子どもの健全な心身の発達を図ることか？
〈養護・教育・保育・養育〉

2）保育所とは・・・
〈幼児福祉施設・児童福祉施設・児童養護施設・児童相談所〉

3）保育所保育指針において、発達については、「おおむね～」という形で示されているが、これはなぜか？
〈まだ研究上、解明されていないため・個人差があることを含意するため・発達心理学の知見を生かしたため・保護者にわかりやすくするため〉

4）保育所保育指針における教育の5領域の種類は、幼稚園教育要領の5領域とほぼ共通である。
〈○・×〉

5）保護者との連携は、できればしたくない（子どもとだけ関わっていたいものだ）と思う。
〈とてもそう思う・まあまあそう思う・あまりそう思わない・まったくそう思わない〉

6）昨日の保育総合演習の復習です。子どもの権利について、受動的人権と能動的人権がありましたが、どちらが歴史上早く認められましたか？
〈能動的・受動的〉

7）子どもの能動的人権について論じた思想家として昨日の話で出てきたのは？
〈エレン・ケイ、オウエン、コルチャック、アンネ・フランク〉
8）保育所保育指針において「子どもの人権」という場合、それは能動的人権であると思う。
〈YES　そう思う・NO　そう思わない〉

11月25日（授業の途中に実施）

1）発達の順にカードを並び替えるとどうなるか？（A～Hのカードの並びを4つ選択肢とした）
2）ビデオの○○先生の保育に出てきた子どもたちは、カードのどの発達区分になるか？（A～Hより選択）
＊それぞれ話し合いをはさみ、2度ずつ行った。

3. 学生からの声（11月25に行ったアンケート結果より）

ここでは、学生に記入してもらったアンケートより、「EduClickの良い点と悪い点をひとつずつあげてください」という問に自由記述してもらった内容についてその概要を報告したい。記述の後ろの（　）内は同様の内容についての記述があった数。

良い点

楽しい・おもしろい　(28)
他の人の答えや意見がわかる　(11)
わかりやすい・覚えやすい　(11)
自分が理解したか、わかる　(10)
みんなが参加できる　(8)
復習になる　(8)
間違っていても恥ずかしくない、無記名性　(3)
集中できる、能動的になりやすい、やる気になる　(3)
覚えておくべきポイントが分かる
正解だったら嬉しい
息抜きになる
指先を使う

悪い点

機械の操作の不慣れや不具合　(16)
機能によって（早押しなど）がおもしろくない　(7)
選択肢なのでいい加減になる　(6)
見にくい　(4)
私語が増える、答えが聞こえてくる　(3)
配布と回収の手間　(2)
起動の時間（待ち時間）　(2)
覚えるだけになりがち、授業内容の理解が偏る　(2)
他の学生の生の声が聞けないところ　(2)
使いにくい
答えがひとつしかないところ
問題数が少ない
制限時間による焦り

学生はEduClickを利用した授業は楽しんでいたようである。とくに〈他の人の意見や考えが分かる〉や〈みんなが参加できる〉〈間違っていても恥ずかしくない、無記名性〉が合わせて21名で、みんなが授業者とのやりとりにそれぞれ参加できる点が魅力だったようである。〈復習になる〉や〈覚えておくべきポイントがわかる〉という意見では、自分の学習過程の中に主体的に取り込んでいる様子が窺える。11月は知識伝達を中心とした講義であり、一方通行となりやすい内容であったが、楽しいというポジティブな感情とともに復習ができたようである。

その一方で、選択肢のある問いの限界としての指摘もあった。〈選択肢なのでいい加減になる〉

（大谷大学短期大学部　西村）

〈覚えるだけになりがち、授業内容の理解が偏る〉〈他の学生の生の声が聞けない〉といったものは、大学での学びが主体的思考を中心とした過程であることが分かってきた後期の学生たちにとって、物足りないものであったようである。小グループでの意見交換や内省的に論じる作業など、他の方法も使いながら使用するとより活きてくるのではないだろうか。また同時に、ソフトや機械操作の不慣れや機能選択で、講義者が使い慣れることも必要かと思う。

配布や回収の手間について、もっとネガティブな意見が出るのではないかと思っていたが、こちらで先にルールをきちんと決めて、それを徹底することで迷いなく学生も動くことができたようである。

4. 試行してみて・・・

学生は、担当者の別の科目（「保育原理Ib」）においてもクリッカーを使いたい、最終日には「もっと使いたい」というなど、まずは楽しんでいる様子であった。しかし、同時に個別に話している中では、（学習内容が）身についているかは分からない、という意見もあった。アンケートにもあったが、講義授業でこちらの問いかけに声で答える学生は数人に決まってきており、全員がこちらと一対一で即時的につながる形で関われたという実感が持てていたのは、このようなツールならではではないかと思う。またその講義者との一対一の関わりだけではなく、クラスがどのように感じているのか、考えているのか、これも即時的に知ることができ、クラスに参加しているという感覚をもてるのも、独自性といえるのではないだろうか。

今回は復習を中心に使用したが、内容に組み込みながら、小グループでの話し合いをはさんだ形でも使用してみた。知識を記憶する種類の教育内容については復習の小テストの形でも効果があるようであったが、より考えたり、知識を応用したりする際には、後者のような方法のほうが効果的なように感じた。

授業の進度については、EduClickのない授業と比較して遅かった。通常授業でも、復習として学生の書いた感想を読み上げることを通して思い出してもらったり、感想を読んでみて理解しにくかったように感じる部分について再度解説したり、新しい内容の中で以前の重要な概念について質問したりする形で行っているが、EduClickを利用する復習の方法では、復習の部分がより体系的になる分、時間がとられることになっていた。シラバス段階でEduClickを想定した余裕のある計画が必要だと感じた。

何よりも、今回EduClickという新しい教育方法を試行してみることで、自分の授業において何を伝えたいのか、学んでほしいのか、という授業目的や内容の部分、そしてそれがどのような授業できちんと伝わるのか、発問は正確だろうか、といったことを含めた教育方法の部分を振り返り、反省することができた。学生たちが講義においても機会さえあれば、どの学生も対話的に参加したいと感じており、また「みんなが参加している」学びの共同体の中で学びたいと感じていることも分かった。このような機会を与えてくださり、京都FD開発推進センターのみなさんに感謝申し上げたい。

クリッカーを用いた看護学技術の修得を目指した演習の試み

報告者　　梶谷佳子（京都橘大学　看護学部）

Ⅰ.クリッカー活用の動機

看護学における技術教育は、既存の知識を活用しながら技術を修得することが求められる。これまで演習において演習前後に知識の確認のための小テストを行ってきた。小テストを導入してきた理由は以下の3つである。

1. 学生が適度な緊張感をもって講義に臨めるようにすること
2. 理解度を確認すること
3. 必要なポイントを質問することによって、講義の中心的な内容の知識の定着を強化することであった。

質問内容はその日の演習目的・目標に基づいてオリジナル問題を考えたり、国家試験の過去問題を出題したりしていた。

これまでの質問の出し方は、1人の学生にマイクを手渡し、学生はクイズを音読し、その学生が答えを述べる。他の学生は質問の書かれた用紙を見ながら、各自考え解答を用紙に記入する。解答は質問の内容によっては、各自で調べるように促したり、その場で答えを与えたりしていた。約10題ほどのクイズであったので、出題数と同数の学生が答えることになる。

クリッカーを用いることで、学生の回答の傾向をつかむことができ、学生の理解度の確認ができるのではないかと考えた。即時的に状況が分かれば、授業にその結果を反映できるのではないかという考えで試験的にクリッカーを用いた演習を行った。

Ⅱ.科目の概要

1.科目：フィジカルアセスメント演習Ⅱ「運動器のアセスメント」
2.学年：看護学部看護学科1回生
3.日程：Aクラス2009年12月3日
　　Bクラス2009年12月10日
4.単元目標：
　1）運動器の解剖生理が理解できる。
　2）運動器のアセスメントに必要なアセスメント項目が理解できる。
　3）効果的な運動器についての問診ができる。
　4）関節可動域の測定ができる。（角度計）
　5）筋力の測定の方法が理解でき実施できる。
　6）得られた結果の正常、異常について、根拠をもった判断ができる。

5. 運営

時間	演習内容
13：00 ～ 14：30	（90分）講義、DVD・VTR視聴
14：40 ～ 15：55	（80分）実施・問診・視診・触診
15：55 ～ 16：10	（15分）まとめ

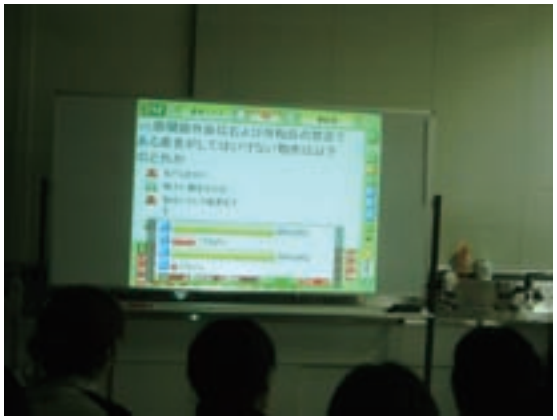
6. クリッカー使用のタイミング

上記運営の13時の開始直後の講義の最初と15時55分からのまとめのところでクリッカーを使用した。

Ⅲ. クリッカー使用の実際

最初はクリッカーの扱いを理解させることを目的とし簡単な問いかけをした。「私は（1. 女性である・2. 男性である）」という質問であった。次の質問は「私はこの科目を（1. 1回でパスする・2. 1回でパスできない・3. 分からない）」とした。練習問題にはリラックスして取り組めたようである。学生達は、集中して白板の文字を読み、真剣に答えていた。

3問目以降は演習科目の前提科目となる内容4問の復習とした。まとめの時間で用いた質問は6問で演習内容の理解度を問うものであった。



今回クリッカーを初めて使用したこともあり、解答時間を設定していたが、操作上の不手際により自動終了できなかった。時間を競うことは目的としないことから、解答を数回かえる学生や反応しにくいクリッカーがあったため、全員回答するまで待ち、終了とした。途中、複数回答のテストで、2つの回答を選ぶことが可能であるとのアナウンスし進めたが、問題に正解数を書いておくとよかったのではないかと考える。複数回答の質問に関してその時々に正答率は表示されてはいたが、記録には残っていなかった。使用前に使用方法については説明を受けていたものの、熟知できていなかったこともあり、使いこなせていなかった。

クリッカーの配布については、演習は助手の教員1名と運営するため、演習開始時に配布し、演習終了後に回収した。クリッカー配布による演習時間への支障はなかった。

Ⅳ. クリッカーの記録からみる学生の状態

学生の正答率と回答までの時間について以下の表に示す。

	Aクラス　n=49		Bクラス　n = 51	
問題	正解人数（%）	時間	正解人数（%）	時間
1	43（87.3）	11.5	37（72.5）	6.9
2	40（81.6）	11.1	36（70.6）	10.9
3	42（85.7）	12.5	42（82.4）	13.8
4	29（59.2）	10.8	24（47.1）	10.2
平均	38.5（78.5）	11.4	54.4（68.2）	10.5

表1　演習前の復習テスト結果

表1に示すのは演習前半に行ったテストの結果である。フィジカルアセスメント演習に先駆けて行われたフィジカルアセスメントⅡでいわゆる解剖・生理学の内容である。開講時期が同時期であるため、学生は試験をフィジカルアセスメントⅡの試験を受けていない状況である。ほとんどが70～80%台の正答率であるが、最終問題の正答率が40～50%台で低かった。最終問題は筋肉や骨格の運動をつかさどる神経系の名称を問うものであったが、正確に理解していないことが判明した。講義を1回受けるだけでは知識は身についていないことを自覚させることができると同時に、知識を活用するための復習の必要性を示す契機となった。

	Aクラス　n = 49		Bクラス　n = 51	
問題	正解人数（%）	時間	正解人数（%）	時間
1	29（58.0）	12.4	17（33.3）	13.3
2	27（54.0）	37.3	23（45.1）	32.4
3	34（68.0）	23.5	34（66.7）	30.3
4	41（82.0）	15.8	37（72.5）	37.0
5	39（78.0）	24.5	39（76.5）	39.0
6	31（62.0）	37.0	35（68.6）	35.0
平均	33.5（67.0）	25.0	30.8（60.5）	31.1

表2　演習後の復習テスト結果

表2は演習直後に行ったものである。演習は教育目標でいうと精神運動領域の目標を達成することが中心となり、学生側からすると実施することに精一杯で、根拠を問いながら行為を行うことが困難になりがちである。問題には以下の特徴がある。

1は関節の種類を理解し、指示された関節の名称を正確に表現できなければならない。

2、3は関節の動きを専門用語を用いて表現できることが求められる。

4は関節の動きの特徴を理解する必要がある。

5、6は演習内容を理解し、考えを発展させなければならない応用問題である。

学生は先程まで行っていた1つ1つの行為を専門用語を用いて正確に表現することが困難である。演習後の振り返りの必要性や専門家としてのテクニカルタームを身につけ活用できるようにす

（京都橘大学　梶谷）

るためにも事後の学習は必要不可欠である。演習におけるこのような学生の学び方の特徴を学生自身が理解しておくことで、自己学習の動機づけになるのではないかと考える。

V. 学生アンケートの結果

クリッカー使用後に学生にアンケートを行った。「クリッカー使用のメリットとデメリット」という課題で提出を促した。100名に配布51名（回収率51%）から回答が得られた。

大半の学生は楽しかったと答えており、今後も使用して欲しいとクリッカー使用について肯定的な意見を記載していた。

以下に具体的な学生の意見を述べる。

〈メリット〉

- クイズ形式で授業の復習ができるので楽しかったし、学ぶことも同時にできてよかった。その場で、正解・不正解がわかるのが良いと思う。
- テストを作ると時間がかかるけれど、クリッカーなら時間をかけずに作れるし、情報処理も簡単だし、毎回小テストをしてもらえるとありがたいので私は賛成です。
- クリック一つで、クイズ感覚で問題に答えられるのはとてもよかったです。でも、正解率が出るので、大人数の授業にはいいと思います。
- 知識が頭に執着する気がした。
- 1人1人が参加できる。みんなの解答が見える。
- 全員が問題を解いて参加できる。楽しく問題が解ける。
- 正解数が分かる。
- 楽しみながら問題を解くことができ正答率がすぐに分かり、他の人がどの答えを選んだか分かるので話しも広がってとても良いと思いました。また、最後に自分の点数もすぐに見ることができるのがとてもいいです。次からも使いたいと思いました。クイズ感覚で楽しみながらでき、それとともに教員の方では記録が残るので解答はテストの感じがするので、緊張感もあってとても良かった。
- 楽しく勉強ができる。スムーズに授業が進む。
- 楽しんで学習できる。全員が直接参加できる。
- 机やペン無で気軽に勉強できていいと思う。制限時間があるので、だらだら考えすぎることがないので短時間で決断する訓練になると思う。
- 学んだ後にすぐに問題に取り組むことができ間違って覚えていたことや知らなかったことをすぐに確認することができるので良いと思った。国家試験の問題にも挑戦できたので、もっと勉強しないといけないなぁという気持ちになった。
- 楽しかった。全員に問題を配布しなくても、一つの画面だけで全員が一斉に回答できて、後で成績も見ることがで

きとても効率が良い学習方法であると思う。
・演習の内容が理解できているか確かめることができる。何が理解できていないのか知ることができる。
・教員に自分の解答が分かるという点で間違えることができないという緊張感をもって受けることができるし、選択肢もあってよいと思う。
・すっごい面白かったです。普段の授業から使えたら授業が楽しくなるんじゃないかなぁっと思う。
・クイズみたいで楽しかったです。みんなの解答が％で表示されるのが良いと思う。また間違えたところが先生に知られてしまうので、頑張って勉強しなければと。
・授業を聞いて問題を解くより楽しみながら覚えることができた。
・自分の勉強不足を痛感した。すぐに答えが分かって問題文もまとまってて良かったです。
・クイズ形式の授業は初めてだったので新鮮でした。嫌でも参加型の授業になるので、とても良いと思います。
・クイズ形式で楽しく重要ポイントを復習することができました。同じ時にやってる人たちの正答率を知ることができ、また自分の正答率が分かるので学習意欲が出てきます。
・楽しい、データが残るのでとても良いと思います。相談できないようににすればテストもできると思います。問題と結果がもう一度自分達で見られるようにしたら文句ないです。
・自分の考えや意見が選べる形式なので、講義での使用は便利でよいと思う。
・楽しかったけど、後の方では画面がみえなかった。でもそれは自分がメガネを忘れていたから仕方ない。
・楽しく知識をみにつけることができた。
・楽しかったです（3）
・よかった。国試も出してくれた。選択肢があると自分の間違いがわかりやすい。
・楽しんでできた。授業に参加している感じがある。ほどよい緊張感をもってすることができた。
・とても楽しかった。勉強への積極的な参加が期待されると思います。授業以外の勉強で使いたいと思った。
・とても楽しく学習できる材料だと感じた。今まで学習したものがデータに残るので自分の弱いところが比較して確認できるので便利だと思った。学生の学力向上のためによい。
・主体的に参加できる授業なるため興味・関心がわいた。また先生側に履歴が残るためまじめに取り組むことができます。
・学んだ内容をすぐに確認できるので今後の授業で導入してほしい。
・クリッカーを使っている間は眠くならないし理解もしやすく楽しいので良いのではないかと思う。
・新しい授業の形だったので興味をもって授業に臨めた。
・授業の復習ができわかりやすくて良かった。
・問題形式と言うのが良かったです。
・よかった。
・おもしろかったしみんなの理解度もわかるし良かった。
・ゲーム感覚で楽しみながら勉強の復習などができるので堅苦しくなくいいものだと思った。
・クイズ形式でできたので楽しくできた。その場で自分の回答の正誤がわかり間違っても学べるといいなと思いました。
・クイズ形式で楽しみながら学習できるので良いと思った。これからも導入してほしい。
・みんなで問題を解いていくので楽しんで勉強ができてよかった。どのくらいの割合の人が正解しているのかもすぐに見られて自分だけが間違っていたら恥ずかしいので勉強する気になると思った。

（京都橘大学　梶谷）

・クリッカーを使って問題に答えるので授業に参加しているという意識が高まって集中できた。正解者や解答者が目に見える形で分かるので周りに負けないようにもっと勉強しようと思った。
・クリッカーは使いやすかった。良かったと思うのは正解が何人ということが一目でわかることから、自分の勉強が足りないことを感じることができる点です。買う時は今払っている学費内で買ってほしいです。
・クイズ形式で面白かった。国家試験と同じく選択問題になっているので慣れるのでとてもよいと思う。手を挙げるのは恥ずかしくて周りと合わせてしまう人もいると思うのでボタンを押すだけなのでやりやすい。
・クリッカーを使っての授業は楽しかったです。今後続けてやってほしいです。
・先生も学生も便利だと思う。先生と学生が同時に問題に取り組むことができるのでプリントの問題を探す手間が省ける。また先生も成績に関係なく学生の理解度や弱いところを分かり指摘できるので良いと思う。
・クリッカーを使って確認テストをしていつもよりとても楽しかった。少しゲーム感覚ですぐに答えないといけないので即座に判断する力もつくのではないかと思った。また他の人が正解している問題が自分は正解できなかったりすることが一目でわかるので毎回統計を出してもらえるんであればうれしい。
・クイズ形式で面白い。クイズがでることで自分がどこを正解しているのかいないのかが分かる。その後の学習に繋がる。

肯定的な意見に着目すると、授業に参加している実感があることや他学生と自分の理解の比較ができること、即時に判断する能力が高まること、即時的な正答率がでることから自分自身の理解度を確認できること、他者との比較から学習への意欲を高めることなどがあった。

これまで演習で行ってきた、1人の学生がマイクをもち順番に答えていく方法から、クリッカーを用いる方法を行うことで、全学生が必ず意思表示をしなければならない状況を生み出すことが可能となった。自他の比較により競争心をもつ学生もいることから、自尊感情を損なうことのないような配慮も大切である。数年後の国家試験は他者との比較で合否が決まるのではなく、合格ラインの得点の取得によって合否が決まることから、自分自身の知識や技術に自信をもてるような学習の成果を得られるような活用ができればよいと考える。

〈デメリット〉

・解説がないのが不十分と感じた。
・デメリットは押し間違いがあるところです。
・自分で間違った問題の解説がなく、すぐに理解することができないので、そこが欠点だと思いました。
・ちょっと無機質というか機械的な感じがした
・時間が気になって問題をしっかり読めない。
・ボタンがたくさんあって使い方が難しい。
・コンピューターに頼りすぎなる。復習がしにくい。
・スクリーンを見てその場で答えるのでやりっぱなしになる。間違った問題を復習できない。あてずっぽでは意味がない。
・演習の時間が減る。
・間違ったところを後で見ることができないため復習には使えないと思った。
・変えたいとき、答えが2つあるときの使い方をわかりやすく説明して欲しかった。
・遊び感覚で学ぶにはすごくいいと思うけど、本当にテストで導入されたら、自分が最終的に何を押したのかわから

んし、押し間違えもあるし、人と相談もできるし、まじめにはしづらいと思います。
・問題文が絵や映像も使うとより分かりやすくなると思う。
・画面が見にくかった。
・紙テストだとテスト前は勉強しやすい。クリッカーだとその場でするので覚えきれないので不安。
・紙のテストでないと後から思い出せないなと思った。
・答えが1つの時は最後に押したものなのでわかりやすいが複数回答の時もそうなのかよくわからない。そういう時に自分の回答がどうなっているのかわからないのは不便だと思った。
・レジュメに載っている方が私個人には好きです。なぜならその日の授業にしたことを後日振り返ることができるからです。1つ1つが高いから大変なプレッシャーです。いつか絶対誰か一人は壊しそうで怖いです。
・画面が小さいと困るという点とクリッカーが小さいので落としやすく注意が必要だと思いました。
・プリントに印刷してもらえなかったら後で復習する時手元にないので困るなぁと思った。
・スクリーンなので後の人が見えない可能性がある。

デメリットの意見に着目すると、問題を紙ベースで手元に残したいとの意見があったが、演習終了後に配付する予定であったため、配付済みである。解説については、全ての問題について与える必要はないと考えている。手元の資料やテキストで理解できるものと、教員によって解説を加える必要性のあるものを教員と学生が共通理解することで、この問題は解消されるであろう。

学習環境について、今回は演習室で用いたため、スクリーンではなく、ホワイトボードに映写したことで画面の限界があったため、全員がしっかりと見える工夫は今後必要になろう。図の大きさや文字の大きさは教員のクリッカーの使用方法を熟知することで解決されるであろう。

まとめ

今回、初めての試みでクリッカーを用いた演習を行った。クリッカー使用のメリット、デメリットを十分に理解したうえで、活用方法を検討する必要がある。教員の力量が問われるところであるが、単に楽しい演習ではなく、新たな知識を獲得したり、思考を発展させたりできるような演習を目指したい。

今回、クリッカーをお貸し頂きました京都FD開発推進センターに感謝いたします。クリッカーシステムの活用についてご教示いただきました株式会社内田洋行の鈴木大悟氏に感謝いたします。

（京都橘大学　梶谷）

2010年度活動方針、2011年度以降の連携体制案

2010年3月18日
センター会議・連携運営委員会資料

2010年度事業計画

1. 2010年度事業計画

2010年度は、昨年度に作成したFD研修プログラムを実際に運用し、長期的に実施可能なFDプログラム体系として確立することに重点を置く。補助金最終年度にあたり、京都FD開発推進センターが中心となり、連携大学のFD担当者と協力してFDの「京都モデル」を実現していくための体制固めと長期的展望を確立する。

《研修プログラムの実施とモニタリング》

2009年度に固めたFD研修プログラムを実施するとともに、内容の調整と評価・フィードバックを重ね、補助事業終了後に向けて最終的な体系化を行う。

・2009年度に刊行し好評を得ている「FDハンドブック」をシリーズ化して発行する。ハンドブックをテキストとして活用した階層別の研修プログラムを展開する。

・新任教員を対象とした合同研修プログラム、連携大学のFD担当者を主な対象とした「京都FDer塾」の定期開催、連携大学の学長・副学長を対象とした「京都執行部塾」を、補助事業終了後にも定例開催していけるよう、プログラム化する。

・2009年度にメルボルン大学に委嘱して作成した研修プログラムを継続実施するとともに、アメリカでも同様のプログラムを作成できるよう検討する。

《FDシステムの最終構築と保守方針決定》

・クリッカー、WEBアンケートシステム等の様々なICT技術を、連携大学が共通して利用できるシステムとして紹介し、活用事例を広げていく。

・補助事業終了後の運営方法および機器リプレイスを含めた保守方針を決定する。

《分野別汎用プログラムの開発とモニタリング》

京都地域の特色である芸術系大学・学部のFD連携を進めていくため、海外の先進事例を紹介し、活用方策を検討する。海外から講師を招聘し、セミナーを開催することも検討する。

《FD推進のためのSD研修プログラムの検討》

今後ますます教育の質が問われる時代に向けて、より実効性のあるFD活動を支える職員の能力向上が必要になる。国内・海外の調査成果を参考にして、FDを支援する職員の能力向上を図るためのSD研修プログラムの開発を検討する。

《2011年度以降の組織体制の確立》

京都FD開発推進センターの継続とファカルティ・ディベロッパーの養成、FD研修プログラムの実施体制、大学コンソーシアム京都への組織移管等、補助事業終了後の組織体制と財政方針を検討し決定する。

《評価システムの実施体制と評価基準、評価組織の決定》

学外識者により本補助事業の評価を行なうとともに、補助事業終了後の評価方針・方法を決定する。

《事業総括と最終事業報告書の作成》

3年間の連携事業の総括を行い、最終事業報告書を発行する。

2010年3月18日
センター会議・連携運営委員会資料

2011年度以降のFD連携体制の方針（案）

この方針案は、文部科学省により2010年1月に行なわれたヒアリングにおいて説明したものですが、本センター会議、連携運営委員会の承認を得た上で、財団法人大学コンソーシアム京都に対して2011年度以降の組織移管および財政措置を要請するものです。財団法人大学コンソーシアム京都による組織決定が方針実現のための前提となります。

1. 実施主体

補助事業終了後は、戦略連携3年間の実績を活かし、戦略連携18大学から大学コンソーシアム京都の加盟50大学・短期大学全体が連携するFD事業を展開するための体制を確立する。

2. 実施体制

FD研修プログラムの開発と実施、FDの啓発・広報活動の両面を含んだ運営体制を、以下の通り構築する。

①佛教大学に設置されている京都FD開発推進センターを、大学コンソーシアム京都の附置センターとして移設する。

②センター組織としてセンター会議、FD連携運営委員会、研究ワーキンググループを置き、戦略連携事業の活動体制を基本的に継承する。

③大学コンソーシアム京都が独自事業として実施してきた「FDフォーラム」をセンター事業に移管する。

④専門研究員、専門調査員は大学コンソーシアム京都が雇用するよう要請する。事務担当は大学コンソーシアム京都事務局より担当者の配置を要請する。

FD連携活動を大学コンソーシアム京都加盟50大学へと拡大移行させるにあたり、安定したセンター運営ができるよう、当初しばらくの間、会議等の構成員は現戦略連携メンバー校の占有率を高くし、徐々に他の加盟大学のメンバーの増加・入れ替えを実施していく。

3. 財政措置

センターの機能を継続するために、当面は、①大学コンソーシアム京都の特定資金から必要額を捻出するよう要請する。加えて②事業内容の合理化および費用対効果向上の努力、③各行事での参加費の徴収・増額、出版刊行物の販売等をもって財政基盤の確保に努める。

以上